
ジョーンブリヤン

彩杉 厚智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジョーンブリヤン

【Nコード】

N0326Z

【作者名】

彩杉 厚智

【あらすじ】

光太郎は中学三年生。母、葵の見舞いを日課として暑い夏を過ごしていた。葵は2年前に交通事故に遭っていた。そのとき幸い一命は取り留めたものの脳に影響が残り毎日午後4時半頃に目を覚ますが2時間経つと眠ってしまうという特異な症状を抱え入院生活を続けていた。そんな光太郎が迎えた高校受験まであと半年という二学期の初日。クラスに佐伯という名の大人びた外見で他人を寄せ付けない雰囲気をもった女子生徒が転入してきた。美術を強く志す佐伯は美術部OBの光太郎に部に入るにはどうしたら良いかと持ち

かけてきたため幽霊部員だった光太郎は困惑しながらも何かと世話を焼き、勉強まで教えることになってしまった……。中学生の拙い初恋と夢をテーマに。

自転車が揺れるたびにカゴに入れた一輪の小ぶりなひまわりがイヤヤをするように左右に顔を振る。

もつと優しく扱ってよ、ただでさえ暑いんだから。

そんな声が聞こえてくるようで僕はハンドルを握る両手にさらに力を込めた。ひまわりには申し訳ないがスピードを緩めるわけにはいかない。僕にできることは汗で滑りそうになるハンドルをしつかり握り少しでも自転車の揺れを少なくすることだけだった。

巨大に膨れ上がった夏の太陽が轟々と音を立てて熱波を送ってくる。

その太陽を正面に見据えて突き進む自分の姿に僕はイカロス进行い浮かべる。警告を無視して太陽に近づきすぎ羽を失って墜落したギリシャ神話の孝行息子。スチール製の自転車もこの暑さの前では蠟のように溶けてしまいそうだった。

そう言えば昨日父に「明日からまた暑くなるらしいから熱中症に気をつけるよ」って言われたんだっただけ。

確かにまとわりついてくる空氣の熱さは尋常ではない。自転車を漕げば漕ぐほど体温は上昇し頭の奥がぼーっとしてくる。

僕は一旦自転車を止め肩から襷に掛けたスポーツバッグからペットボトルのコーラを取り出した。半分ほど残っていた黒い液体を喉に流し込む。

先ほど買ったばかりなのにすでに湯気が出そうなほど熱くなっていて甘ったるいだけで清涼感は全くない。

病室の備え付けの冷蔵庫で冷やしななおそうかとも考えたが僕はそのままペットボトルの底を空に向けて飲みほした。身体に悪いから、と炭酸ジュース嫌いの母さんの目にとまればまた小言を言われるに違いない。

とりあえず水分補給という作業を完了し僕はペダルを強く踏み込ん

だ。

間もなく五時だ。母さんはもう目覚めているかもしれない。

僕はどんどん加速した。両手を広げればそのまま空へ浮き上がりそつなぐらいにスピードを上げた。勢いそのままに駐輪場に突進する。

病院に駆け込み仁科葵とネームプレートの掛かった母の病室の前に立つともう一つ奥の病室のドアが開き、若い看護婦が大きな花束と空の花瓶を抱えて出てきた。

反射的に僕は手にしたひまわりを後ろ手に回してその女性とすれ違う。彼女が手にしている絢爛たる花々と比べると僕の萎れ気味のひまわりはやけにみすばらしく見えた。

ひまわりの一輪挿しなど余計に病室を寂しくさせるだろうか。しかも大分くたびれてきているし。

僕は頼りなさげに見える細い茎を弄んでひまわりをくるくると回してみよう。

「可愛らしいひまわりね」

声の方を振り返ると花束と花瓶を抱えたままの先ほどの看護婦がにつこりと笑いかけてくれた。

僕はその笑顔に少し勇気をもらって小さく頷くと母さんの待つ病室のドアに手を掛けた。

「光太郎っ！」顔をのぞかせると待っていたとばかりに窓際に立っていた母さんが声を掛けてきた。「早く、こっちこっち」

「起きてたんだ。ごめん、遅くなって」

「そんなこといいから、早く早く」

母さんは無邪気な声で僕を呼ぶ。それはまるで新しい洋服をデパートに買いに来た少女のようだった。窓から入り込む西日に頬を輝かせた母さん。そのコロコロと響く声は入院患者とは思えない陽気さだ。ここが病室でなく、母さんがパジャマを着ていなければ誰も母さんのことを病人だとは思わないだろう。

「ほら、あそこ」

母さんが指さした窓外の病院の壁になにやら茶色い小さなものが見える。あの形は昆虫のようだ。

「蝉の抜け殻？」

「そうよ。きつと昨夜のうちに幼虫がこんなところまでえっちらおっちら上がってきて、ここで羽化したのよ。見たかったわね、蝉が殻を破って飛び立っていくところ」

「そんなの」

見たくないよ、と言いかけて僕は口を噤んだ。

どちらかと言うと母さんは虫が苦手だったはずだ。僕がつかまえてきた小さなてんとう虫が家の中を飛び回っただけでパニックになったし、ゴキブリなんか見るのも嫌で絶対に新聞紙で叩けない。カブトムシやクワガタはそのゴキブリの親戚だと言ってきかない。そんな母さんが昆虫の羽化の瞬間を見たいと言っていることに切ない気持ちになる。

きつと母さんにとってこの病室での生活がそれほどに味気なく張り合いに欠けるものなのだ。

「あら、ひまわり。小ぶりでかわいい！」

母さんの笑顔が一層明るくなる。

その表情に僕は心の中で快哉を叫ぶ。

母親を見上げる無邪気な幼児のように健気に太陽に顔を向け続けるひまわり。それは母さんの大好きな花だ。だから僕はこの季節には通学路や校庭でひまわりが咲いているのを見つけると罪悪感に苛まれながらも必ず失敬してくる。

「あ、早く活けなきゃ」

僕はベッド脇の四角くて細長いガラスの花瓶を掴んで洗面所に向かう。

すっかり俯いてしまっているひまわりを水に差し部屋に戻ると白衣を着た医師がベッドの脇に立っていた。

ベッドの上に座り血圧を測られている母さんが医師の向こうから小さく手を振る。

僕は、こんにちは、と医師に挨拶をして花瓶を窓際に置き処置が終わるのを待つ。

ピピピと電子音が鳴る。母さんが脇から体温計を取り出すと、医師は無言で受け取って病室から出て行った。

入れ替わりに僕が母さんの横に移動してパイプ椅子に腰を下ろす。
「あの先生、独身かしら？」

母さんは少し乱れたパジャマを直しながら医師が出て行ったドアに目をやる。

「さあ」

「あんなに大人しくつちや一緒にいても面白みがないわよね」

「でもお医者さんって儲かるでしょ。だったら結婚したい人もいるんじゃない？」

何の気もなしにそう言うのと母さんはじつと僕の眼を覗き込んだ。た。

「中学生の光太郎には分からないかもしれないけど、お金じゃないのよ、夫婦って」

将来を憂うような重い口調で言われても困るって。一般論として思いつきで言っただけなんだから。

僕は話を変えるためにスポーツバッグの中を漁った。本屋の袋を取り出し母さんの膝の上あたりに置く。

「はい、これ」

「ありがとう。いつも悪いわねえ」

全然悪いとは思っていない調子で母さんがにんまり笑う。

中身は三十代の主婦層をターゲットにしたファッション雑誌だ。毎月これを買うのが僕の一番手を焼く任務と言える。

買い始めて二年近くになるが未だにコンビニエンスストアのレジでは赤面してしまつて店員さんの顔をまともに見ることができない。しかしそんなことはあっけらかんとした性格の母さんはきつと思ひもよらないだろう。

工口本を買うのとどっちが恥かしいかな。友達から借りることは

あつても自分で買ったことはないから分らないけど。

「あら、こういうのってかわいいわね。ね？ね？」

母さんは早速雑誌をペラペラめくり出し、気に入ったものを見せってくる。

しかし中学三年生の僕は同世代の女子がどんな流行を追っているのかも理解の外。もちろん三十代の主婦の恰好に良し悪しを言えるほどのファッションセンスを持ち合わせているわけがない。決まって上辺だけの「そうだね」を使うのだが、母さんは僕がどう言うのを期待しているわけではないようだ。鼻歌交じりに次々とページを繰っていく。

母親の若作り。見ているこっちが落ち着かない気分になるから、「母さんはもう四十過ぎてるじゃん」って毒を吐きたくなるけど、やめておく。ずっと病室でパジャマ生活の母さんにとってこの雑誌の中の世界ってどんな風に見えるのかな。そう考えるとじりじりと胸が痛い。

「そう言えば明日から二学期ね」

一通り目を通して気が済んだのか雑誌を閉じて母さんが少し遠い目をして微笑む。毎日院内だけの生活の母さんが今日で夏休みが最後だということに気づいていたことに僕は少し驚いた。

「そうだよ。って言ってもこの一週間毎日補習授業で学校通ってたからあんまり新しい学期が始まるって感じはしないけど」

「どこ受けるか決めたの？」

「高校のこと？」

「他に何か受けるものある？」

「そりゃそうだけど・・・」僕は少し間をとって口を開いた。「K高かなって思ってる」

僕は近くの県立の高校の名前を挙げた。この辺りの公立の中では一番レベルが高いが僕の成績なら落ちることはないという自信はある。

「どうして？」

意外にも母さんはまるで嫌いなピーマンを病院食の中から見つけたときのような苦い顔をした。僕の答えに納得していないようだった。

何故だろう。僕の学力を心配しているのだろうか。

「どうしてってレベル的に大丈夫だと思うから」

「T学園じゃなくて良いの？」

母の言葉に僕は不意を突かれたような気持ちになった。

T学園は県内屈指の全国的にも名の知れた私立の進学校だ。僕が通っている中学校からも毎年二、三人は進学しているようだが、僕の今の成績では客観的に見て合格できるかどうか怪しい。

「ちよつと厳しいかな」

「何が？」

「俺の頭では」

「そうなの？」

「そうだよ」

「光太郎って頭いいんでしょ？」

「そんなことないよ」直球でそんな風に訊かれると否定するしかないじゃないか。「とにかくT学園は俺にはレベルが高いの」

母さんはまだどこか不満そうだった。

一人息子をT学園に、と期待していたのだろうか。そんな教育ママだったつけ、この人。

正直、今、母さんにT学園って言われるまで僕はあまりその学校を意識していなかった。受験まであと半年しかない。それなのに来年どこの高校に通うかはまだ真剣に考えたことがなくて、漠然とだけどK高に行くんだらうなって思いこんでいた。

「本当は、お金のことなんじゃないの？」

そういうことか。母さんが気にしているのは、うちは余裕がないからって理由で僕が私立のT学園を諦めたんじゃないかってことみたいだ。

「もう少し頭の出来が良かったら頼み込んででも行かせてもらっ

だけだね」

僕は今、親に二つ嘘をついた。

一つは頭のこと。

今の僕の学力から判断してT学園は、全然歯が立たないってわけではない。残り数カ月、死に物狂いで勉強すれば何とかなるかもしれない。今の時点で厳しいからと見切りをつけるのは時期尚早だ。

もう一つは意気込み。

他の同級生も同じだと思うけど、僕は高校に対してあまり興味を持っていない。K高に行ったって、T学園に通ったって人生そんなに変わらないだろうって思っている。

中学三年生の僕にはまだ人生の目標なんて全然見据えられていないし、こんなことをやりたいからっていう明確な志望動機を高校に対して持っていない。自分の学力レベルにあった分相応の高校。そういう物差しでしか高校選びなんてできない。だからたとえ頭の出来が良くても頼み込んでまでしてT学園に行きたいかどうかは分からない。

母さんにT学園の名前をあげられたとき、僕の体は軽い拒否反応を示して反射的に否定的な言葉を発していた。きつと頭の中で、T学園に行くにはこれから毎日毎日しんどい思いをして机に齧りつかなくてはいけないこととか、K高ならうちの中学校から二、三十人は行くけどT学園に入ったら知らない人ばかりで寂しそうだとかいうつまらないマイナスなイメージを作り上げてしまったのだから。

まあ僕の高校進学への想いというのはこの程度のものである。

でも母さんはとりあえず納得したようだった。

「くれぐれもお金のことは心配しないでね。そういうのは何とでもなるんだから。・・・じゃあ、少し横になるね」

母さんは瞼の重さに耐えきれない様子でベッドの中に横たわった。時計を見ると六時半を過ぎたところだった。

顔を戻すともうすでに母さんは静かに寝息を立て始めていた。

窓の外はまだまだ夏真っ盛りだ。朝っぱらから辟易とするほどの暴力的な強い日差しには教室の安っぽいカーテンではとても歯が立たない。

窓際に座る僕の特に左半身はカリカリと焼けて今にも身体の中の何かが融け出しそうだ。

「おはようございます。みんな、元気そうね。安心したわ。夏休みの間、怪我とか病気とかした人はいないみたいね」

担任の坂本先生はこの暑いのにブラウスの上にカーディガンを羽織っている。冬になると、モコモコとこれでもかと言うほど重ね着をして、しきりに両手をこすり合わせたり足踏みをしたりする極度の冷え症だ。まだぎりぎり二十代だったと思うが中学生の僕から見ても色気がない。

「俺は心に傷を負ったよ」

教室の一番後ろの席からクラス一の調子者の遠藤が茶々を入れる。

「遠藤君、どういうこと？」

「彼女に振られたってことさ」

教室内が一気に沸く。

かわいそう。良い気味だ。原因は何？彼女って誰だったの？そもそもお前、彼女いたんだっけ。色々な声が錯綜する。

「それはそれは。中学最後の夏休みの思い出としては少しセンチメンタルね」

「俺の夏は早々と終わったわけさ。先生はどうだった？」

「何が？」

「今年の夏は彼氏できた？」

再びどつと歓声上がる。クラス全員が目を爛々と輝かせて教壇に顔を向ける。

「先生のことはいいのよ。先生のことは・・・」

まさかの展開という感じで坂本先生は教卓に目を落としチョーク箱や出席簿に意味もなく手を伸ばしたり髪を掻きあげたりとしどろもどろになっている。

彼氏できたの？彼氏と海に行った？何やってる人？芸能人で言えば誰に似てるの？

四方八方から火の手が上がり四面楚歌という感じの教室に坂本先生の顔が引きつる。

「彼氏なんかそう簡単にできないわよ」

芝居つぼくがつくりと教卓に手をついて見せた担任教師に生徒たちは追い打ちをかける。

「今年の夏も一人だったんだ。かわいそ」

「山田、お前付き合ってたやれよ」

「坂本先生なら俺は構わないけど」

教室内が笑いの渦となる。ホームルームからこんなに盛り上がっているのはうちのクラスだけだろう。そろそろ隣のクラスの担任からクレームが飛んできそうだ。

「もう、私のことはいいから静かにして。今日は皆さんに特別に報告しないとイケないことがあるのよ」

さすがに坂本先生の声にも怒りの色がこもってきて、敏感な生徒たちはぴたっと口を噤む。

普段は柔和な彼女も数年前に一度キレたことがあったようだ。言うことを全く聞かない男子生徒を思い切り平手打ちにしその生徒が口の中を出血してカッターシャツがどんどん赤く染まっていくのに保健室に行くことも許さず平然と最後まで授業を進めたという伝説を誰もが知っている。彼女は空手の有段者だという噂がまことしやかに流れている。

「今日からこのクラスに新しいメンバーが加わるの。佐伯さん、入って」

名前を呼ばれてゆつくりとドアから現れたのはハツとするほど白い肌の少女だった。

彼女は緊張している様子もなく堂々と胸を反らせて手招きする教師に近づいた。教卓と黒板の間に立つ。サツと正面を向く。

瞳を隠す長い前髪。表情を殺した緩まない頬。彼女は唇だけを動かしてハキハキと挨拶をした。

「佐伯杏奈です。よろしくお願いします」

軽くお辞儀をするとすぐに顔を上げ睥睨するように右から左へと視線を飛ばす彼女。

クラス全体がビクツと固まる。少なくとも僕は彼女の顔がこちらを向いたときに慄然としてその瞬間は暑さを忘れ思わず背筋を伸ばしていた。

すらりとしたスタイルの良さと中学生とは思えない大人びた顔つき。彼女は隣にいる坂本先生がかわいそうに思えるぐらい色っぽい、そのひんやりとした美しさのためか容易には近づきがたい雰囲気がある。

「ということで、今日から同じクラスメイトとして皆さん仲良くねじゃあ、佐伯さんはあそこに座って」

坂本先生が指したのは窓際の最後、僕の後ろの席だった。そう言えば朝教室に入ってきたときに、こんなところに机あったっけ、と思った覚えがある。

しかし、まさか中学三年の二学期に転入生が現れるとは思ってもよらなかった。

転入生には何かしらの事情が付きものだが、卒業まで半年ほどのこの時期にとは佐伯家に余程の事情があったのだろう。しかし、そんなことを訊こうものならどういう仕打ちが返ってくるか分からないという不気味さを彼女はオーラとして纏っている。

顎を引き涼しい顔つきできびきびと彼女が僕の方に向かって歩いてくる。

僕は何となく視線を合わせてはいけないような気がして机に目を落とした。横を通り過ぎた彼女が作る空気の流れが妙に冷たくてこの暑いなか僕の腕に鳥肌が立った。

「おい、光太郎」

下駄箱に向かって廊下を歩く僕の背中にクラスメイトの松本陽平の声が追いかけてくる。

彼はサッカー部のキャプテンを務めていた。この夏で部活動は引退した格好だが、県選抜の実力を持つ彼は高校へはスポーツ推薦での進学が決まっただけで夏休み中も後輩たちに混じって練習を続けていたようだ。おかげで陽平は三年生の中では誰よりもこんがりと日焼けしていた。

そう言えば陽平が進学するのは母さんが口にしたあのT学園だ。

T学園はそのブランド化されたと言っても良い知名度を維持するためこれまでの学力重視の方針を転換し近年はスポーツの面にも力を注ぎ少子化の現代でも生徒集めに不安はないと評判だ。僕もT学園を受験し合格すれば校内に陽平という知り合いは確保することができる。しかし、スポーツ推薦の生徒と一般試験での合格者は同じクラスにはならないから孤立感を拭うことには全然つながらない。

「何？」

「今から、沙織たちとカラオケ行くけど、来ないか？」

隣のクラスの沙織は清纯や可憐という言葉がぴったりな学年で、いや、校内で一番の美少女だ。そんな沙織とお近づきになれるシチュエーションが僕の胸にもたらした波動は決して小さくはない。だが、僕は表面上はそれを平然と押し殺した。

運動神経抜群でしかも聡明な顔立ちの陽平は女子からもてる。毎年バレンタインデーにはアイドル顔負けの到底一人では食べきれない量のチョコレートをもらっている。来年3月の卒業式には陽平の周囲でいったいどんな騒ぎが起きるのだろうと羨ましいような怖いような気分で想像するのは僕だけではないはずだ。その陽平の口から沙織の名前を聞いて僕には負け惜しみではなく素直に二人がお似

合いだと思った。そんなところにお邪魔してもいたたまれないだけのような気がする。

「サッカーは？」

「たまにはサッカーから離れて気晴らしするのも重要なんだよ」

「陽平の人生において？」

僕は意地悪そうに笑う。しかし、陽平はいたって真面目な顔つきで頷いた。

「そう。俺の人生において」

陽平とは二年生のとき初めて同じクラスになって話すようになった。4月のクラス替えで隣の席になり、5月、6月とくじ引きで席替えをしたのに三ヶ月連続で左右隣同士になって陽平が声を掛けてきたのだ。

「この三ヶ月隣同士になったけど、これってお互いの人生においてどういう意味を持つことになるんだろうな？」

比較対象にするのもおこがましい程のイケメンからいきなり席順の人生における意味を問われて僕はただただ困惑した。しかし、それだけ考えても僕の頭の中には一つの熟語しか浮かんでこなかった。

「偶然じゃない？」

口に出してから後悔した。

偶然。なんと空虚な響き。

折角我が校のアイドルと仲良くなれるチャンスだったのに、面白みに欠ける奴だと思われたのではないだろうか。

僕は陽平の次の言葉を固唾を飲んで待った。彼は黒板を睨みながら腕組みをして押し黙ってしまった。

「じゃあさ、来月も隣同士になったとしたらどう思う？」

漸く口を開いた陽平はさらに僕を試してきた。

僕は陽平の真意を測りかねていた。彼はこの自分でも嫌になるくらい平凡な容姿の僕をからかっているのだろうか。いや、何故かは分からないが僕は今彼に試されているのだ。誰かこの質問の本当の意味を教えてくれ。いったい正解は何なのか。

僕は自棄気味に口を開いた。

「奇跡じゃないかな」

一瞬「だよねー」と言っただけで僕の手を取るかと期待した。しかし陽平は僕の答えに何の感慨も示さず低い声で「そこまでは言えないな」と呟いただけだった。

ドキドキしながら待った7月の席替えで僕の席はとうとう陽平の横から外れた。前後になってしまったのだ。

僕の前の席に座った陽平はにっこりと振り返りやっぱり問いかけてきた。

「これはどういう意味なんだ？」

「縁、だと思っ」

縁か。縁ね。

陽平は今回は満足そうに頷いて正面に向き直った。

それから陽平は身の回りの物事について意味を僕に問いかけてくるようになった。

晴天が十日続いた意味。新しく使い始めたばかりの消しゴムを失くしてしまった意味。オリンピックが四年に一回である意味。

それを僕は真面目に考える振りをしながら思いつきで適当に答える。その返答に彼は大抵はどこかつまらなさそうに頷くだけなのだが、ときおり琴線に触れるのが男の僕でさえ蕩けてしまいそうな甘い笑顔を見せてくれることがある。僕の答えのどこがどんな風に良かったのかは全くこちらに伝わっては来ないのだが、その笑顔の瞬間には心の中でガッツポーズしてしまう。

将来はプロのサッカー選手になると公言しそのための努力を惜しまない陽平を僕は心から尊敬しているが、そんなやり取りを通して僕は単なる運動馬鹿ではない哲学的な面を見せる彼を愛していた。そう言えば今の席は僕が窓際で彼が廊下側と目も合わせられないような距離になっている。

「陽平はいいとしてもみんな受験勉強は？」

沙織はこの高校を受験するのだろうか。K高校ならこの先三年

間毎日のように彼女の顔を見ることができののだが。

「さあね。遊びにこれるぐらいなんだから大丈夫なんだろう」

少し自分本位で他人のことに気が回らないところがある陽平らしい物言いだった。しかしそんな言い草も妙に納得してしまう。

陽平は常に自信に満ち溢れていて、しかもそれが嫌みではない。彼の周りにはいつも人がいる。彼の魅力は太陽のように人に求められ人を照らしている。

「光太郎もたまには息抜きした方がいいぞ。どうせお前ならK高校だつて楽勝だろう」

僕が周りにひけをとらないことと言えば勉強だけだ。中学に入ってからテストで学年のトップテンを逃したことはない。K高校は公立では一番の進学校だが校内三十位程度に入っていればまず大丈夫と言われている。

「どうする？」

「カラオケかあ」母さんが目を覚ますまでにはまだ時間はある。しかし、僕はカラオケが得意ではない。自分の声がマイクを通して部屋中に響き渡っている状況にどうにもなじめないし、誰かが得意げに歌う曲にあわせて身体を揺らしてリズムを取るのも苦手だった。女子がいるならなおさら緊張して上手にできないだろう。あまり楽しそうなイメージは思い描けない。「俺は、やめとくわ」

「今日も、病院か？」

「まあ、そんなところ」

僕は軽く眉を顰めて見せた。

気が乗らないときはいつもこの手で逃げている。嘘ではないが、100%頷くこともできない。

「あ、いた。仁科君」

僕の顔を見つけて小走りに寄ってくる坂本先生が陽平の肩越しに見える。僕に何の用だろうか。

「じゃあ、また今度な」

陽平はあっさり引き下がった。

僕みたいなパツとしない人間にも声を掛ける優しさや、誘いを断られても軽く受け入れてくれる淡泊さも彼の魅力の一つだと言えるだろう。

「おう」

坂本先生と正反対に走り去っていく陽平に手を挙げて僕は坂本先生を待った。

坂本先生はおそらく150センチメートルもないだろう。決して背の高い方ではない僕とでも向かい合うとかなり見上げる格好になる。

「仁科君。来週の実力テストが終わったら父兄の方と進路について面談することになってるんだけど、仁科君の場合、お父さんになるよね」

坂本先生も当然母さんが入院していることを知っている。

「そうですね」

「仁科君のお父さん時間作れそう？もしお忙しいのならお父さんの都合の良い時間に家庭訪問させてもらってもいいんだけど」

僕の父は県立博物館に勤務している学芸員だ。

去年のこの時期に県内の工場跡地から古い陶器の欠片が見つかり、それが室町時代のものだということが判明して以来、父は急に多忙になった。学生時代に大学院まで進学して考古学を専攻していた父は当然のように発掘チームにしかもリーダーとして組み込まれてしまった。博物館の仕事はそっこのけで発掘現場に派遣されることになったのだ。

日本史の教員である坂本先生もそのことを知っているのだろう。

「父の予定はちょっと僕にも分からないんです」

発掘が始まってからは毎日早朝に家を出て夜遅くに帰ってくる父とは会話をする機会が少なく、この生活リズムがいつまで続くのか全く読めない。発掘のことはよく分からないが、実際携わっている父でさえも見通しが立たないような状況なのではないかと想像している。

「そうよね。発掘だもんね」

坂本先生の声にはどこか羨ましが滲んでいるように聞こえた。日本史を生徒に教えるような人にとって父の仕事は興味深く羨望の的なのかもしれない。

「どうするか聞いてみます」

「うん。時間の調整が必要だからお父さんから学校に電話してもらえると助かるかな。お願いね」

坂本先生と別れて下駄箱に向かう。

これからどうしようか。今から病院に向かっても一時間は母さんは起きないだろう。でも学校にいる理由もない。

下駄箱の向こうから差し込んでいる西日と言うには強すぎる陽光に目が眩む。肌を焦がすような暑さがそこにある。今、外に出るのは得策ではない気がした。図書室で涼みながら勉強でもしようか。

「おい、光太郎」

デジャブのようだが陽平が呼んだのではない。聞き覚えのない女性の声だったからだ。

女子にこんな風に馴れ馴れしく下の名前で呼ばれたことはない。

僕はどぎまぎしながら後ろを振り返った。

そこにはあの転校生が仁王立ちしていた。ホームルームのときの見下ろすような冷やかな視線を長い前髪の間から無遠慮に容赦なく僕に浴びせてくる。

僕は首を竦めるような気持ちでおずおずと佐伯と向かい合った。

「呼んだ？」僕の問いに彼女は小さく顎を引いた。僕は彼女の意図を探るため前髪の間から隠れている瞳に目を凝らした。「何？」

少し声が上ずってしまう。

彼女が僕に何の用だというのだろう。彼女とは今日会ったばかりで、もちろん話すのはこれが初めてなのにどうしてこんなにも気安く呼び捨てにされるのだろう。

女子と話す緊張よりも、展開が読めない不安が先に立つ。

「光太郎ってさ、美術部でしょ？」

彼女は僕の目の前に立ち長い髪を指先で掬い耳に掛けた。黒髪の奥から露わになった少し尖った耳の形と白さが僕の目に焼きついた。うなじに浮かんでいる柔らかそうな産毛の存在に見てはいけないものを盗み見たような後ろめたさを感じてしまふ。僕は思わず視線を床に落とした。

「なんでしょ？」

確認する彼女の声に軽い苛立ちが漂う。

叱られたような気持ちでハッと顔を起こすと僕の目を覗き込むような彼女の力のある眼差しとぶつかった。

「そうだけど」

多少否定したい気持ちを抱えながら僕は頷いた。

確かに僕は美術部に在籍していたがそれは「仕方なく」であり形だけのものだった。

この中学校は部活動を重んじていて生徒は何かしらの部に在籍すべしという校則がある。それで「仕方なく」美術部に入部したのだが、その選択に当たっては母さんの見舞いという事情を考慮したわけではない。

運動が苦手。ブラスバンドのように華やかなイメージがつきまとうのも苦手。囲碁将棋はルールが分からない。結果、消去法の末に残ったのが一人で黙々と作業ができる美術部だったというだけだ。

しかも美術に特筆すべき思い入れがあるわけでもない僕にとって美術部は帰宅部。最低限の活動には参加したが本気モードの部員からしてみれば爪弾きにしたい存在の幽霊部員だっただろう。「だった」と過去形なのは一学期の終わりに引退作品を完成させて三年生は全員引退したからだ。そういう意味でも僕は佐伯の問いに首を横に振りたかったのだが、それを口にしたら、つまらない屁理屈をこねるな、と怒られそうなのでやめておいた。

「良かった」

佐伯が小さく笑ったのを見て、僕は少なからず驚いた。彼女の顔は眉一本動かない鉄仮面ではなかった。彼女がこつこつと簡単に笑顔を

見せるとは。僕はこの掴みどころのない転校生が急に近い存在になったように思えた。

「どうして俺が美術部って」

「さっき、さかもつちゃんに聞いたのよ。この学年に美術部員いませんかって。そしたら確か仁科君がそうよって」

「そ、そうなんだ」

転入初日からいきなり担任教師を「さかもつちゃん」呼ばわりとは。やはりこの御仁は何を考えているのか分からない。

「ねえ。あたし、美術部に入りたいの。どうしたらいい？」

「え？今から入りたいの？」

「入れないの？美術部は転校生入部お断り？」

「そういうことはないと思うけど。三年生はもう引退したんだよ」「絵を描くのに引退なんかない」

そういう問題ではないと思うけど。しかし、胸を張って言われると僕は反論できなかった。

「梶田先生に相談すればいいんじゃないかな」

僕は逃げるように美術の教師で部の顧問の名前を挙げた。

ただ、この顧問は僕に輪を掛けて幽霊的存在で僕が在籍している間に部員の指導に現れたことは一度もなく、絵筆を持った姿すら見たことがない。自分が美術部顧問であるということを認識しているかどうかさえ甚だ疑わしいような教師だ。だからこそ三年生の佐伯がこの時期に入部したいと言い出しても軽く「ご自由に」と言いそくな気はするが。

「カジカジはどこにいるの？」

「えっと」僕はカジカジが梶田先生を指しているのだと思い至るまでに少し時間がかかった。彼女は誰にでもあだ名をつけないと気が済まないのだろうか。「職員室かな。でなかったら美術室の準備室か。目がチカチカするようなワイシャツ着てるからすぐに分かるよ」

梶田先生の色遣いのセンスは、さすが美術教師、凡人には理解できない、と校内で評判だ。どこで売っているのか見当もつかない光

沢のあるテロテロの生地に原色をちりばめた柄は遠目で見ても梶田先生だとすぐに分かる。

「連れてって」

「え？」

「職員室も美術室も場所分らない」

僕は気がひけた。

職員室は生徒なら誰しも足を踏み入れたくないところだし、美術室に行つて後輩の邪魔をするのも嫌だった。引退した先輩幽霊部員の顔など誰も覚えていないだろうがこちらとしてもどんな顔をして入って行けば良いのか分らない。

何とか彼女から逃れる術はないだろうか。僕の心はすでに後ずさりしている。隙あらば駆けだす算段だ。

「職員室はすぐそこだし、美術室はこの校舎の3階・・・」

「カジカジの顔も分らない」

眉間を曇らせて目を細めた彼女の不機嫌そうな言葉に囚われて僕は鬼軍曹に命令された一兵卒として背筋をピシッと伸ばし先に立つて歩き出した。

味噌汁を椀につけながら僕は父の様子を盗み見た。

仕事からの帰りしなに近くのスーパーで買ってきたというアジフライを皿に載せ電子レンジで温めている父。その背中最近少し小さくなった気がする。

首筋や手の甲の肌は赤茶けていてまるで古いレンガのようだ。見るからにカサカサとしていて張りや潤いというものが全く感じられない。少し力を加えればぼろぼろと崩れてしまいそうだ。汗を出すとか温度を感じるとかいった皮膚としての機能は恐ろしく低下しているに違いない。ろくに手入れをせずにこの夏の強烈な日差しを毎日浴び続けた結果がこれなのだ。汗と土埃が複雑に絡み合ったような餿えた加齢臭を周囲に振り撒いていることに父は気付いているのだろうか。

普段は学芸員として特別なイベントがあるとき以外は残業などほとんどなく週休二日をしっかりと守っていたのだが、発掘が始まって以来父は早朝に家を出て夜遅くまで帰ってこず、しかもほとんど毎日出ずっぱりだ。

チーム編成が発表される前からテレビや新聞で例の陶器のことが取り上げられると食い入るように見つめていた父が発掘に直接携われることを喜ばないはずがなかった。「戦国時代の武家屋敷跡だろう。この地域ではこういう発見がなかったから当時の生活様式を知る上で貴重な資料が出土するかもしれない。町のPRにはもってこいだ」と熱い口調で僕に説明していた父は母が入院して以来一番生き生きとした表情を見せていた。

あれからもう一年が過ぎている。

発掘の進捗状況はどうなのだろうか。果々しいとは言えないということは久しぶりに夕食に間に合うように帰ってきて疲れ気味に肩が落ちている父の様子を見れば僕には分かる気がした。

「明日は久しぶりに休みだから俺が朝起きてこなくても心配するなよ」

テーブルについた父は味噌汁を啜りながら僕の顔を見ることなく言った。

父の声は何となく僕の耳になじみがない感じがした。そういえばこの一年間父子の会話はほとんどなかったのだと思い至った。

僕が起きる頃にはすでに家を出ているのだから朝父の顔を見ないのは明日も今日までと変わらないという思いを込めて僕は曖昧に頷いた。

「これからは今までみたいな忙しさはないから」

「了解」

取りあえずそう返事をしたが、父の言いたいことが何なのか僕にはよく分からなかった。

朝起きたら父が優雅に朝ごはんを作っていることがあるかもしれないということか。週休二日が確保されるということか。入院している母に面会する時間は取れるのか。

生温かいアジフライを食べながら待っていても父からは何一つ情報は何も得られなかった。

取りあえず発掘調査は一区切りついたということなのだろう。今後発掘チームがどういうことになるのか、いつになったら普段の暮らしに戻るのかは父にもまだ分かっていないのかもしれない。

「来週、実力テストがあるんだ」

「そうか」

「結果が出たら先生と進路についての面談があるんだって。先生が日程調整したいから電話が欲しいって」

「誰に？」

「父さんに」

「俺に？進路面談？・・・そう言えばお前受験生だったな」父は急に食欲をなくしたように手にしていた茶碗と箸をテーブルの上に置いた。「すまなかったな。ここのところ家のことはお前に任せっぱ

なしだった」

まるで古女房に言うような謝罪の言葉が返ってくると僕は気恥しくて慌てた。

「母さんのこともね」

しまったと思ったときには既に遅かった。非難めいたことを口にするつもりはなかったのに。

父は僕の前でいよいよ恐妻家のように畏まって頂垂れた。

「母さんにも悪いと思ってる」

父は突然茶碗に残ったご飯に味噌汁を掛け勢い良くかきこむと自分が使った食器を流しで洗い、僕がどこの高校を志望しているかを訊くこともなくそそくさと風呂に向かった。

実力テストの出来は可もなく不可もなくといったところだった。学年の順位は9位で辛うじてトップテンを守ったにとどまった。

夏休みに塾の夏期講習にも通いそれなりに頑張つて勉強したつもりだったから結果を見たときには期待外れの印象だった。しかし、思い返してみれば夏の暑さに負け何となくだらけて取組んでいたような気もする。僕だけに夏休みがあつたわけではなくみんなも努力しているのだからそんなに簡単に順位が上がるはずもない。

それでもこの調子でいけばK高校にはまず間違いなく合格できる。そう考えれば少し気持ちも楽になった。

僕は軽く両膝を叩いて立ち上がった。寝入った母さんを起こさないように「また明日」と小さく声をかけ静かに病室のドアを開く。

病院の外は空に膜を張つたような思いがけない薄暗さだった。来たときは空調の利いた病院に入つてもしばらく汗がひかないほど暑かつたのだが、今は僕の頬をひんやりとした空気が撫でていく。

見上げると南の空を煤が立ち込めたような不気味な雲が覆っていた。しかも止めようのないドミノ倒しのようなスピードでその面積は刻一刻と広がりを見せている。

夕立が来る。傘はない。

僕は慌てて自転車にまたがった。

院内に戻つてしばらく様子を見ようか。

一瞬躊躇したが、夕飯の準備を考えるとそうもいかない。耳をすませば大粒の雨が地面を叩きつける音が聞こえてきそうで背後から迫る雲の流れから逃げるようにペダルを踏みだした。

道路上に人影はまばらだった。誰もが雷様の登場を予想して家の中でおへそを隠してじっとしているのだろう。

僕は家路を自転車レースのコースに見立て空いた道をタイヤを唸らせて全速力で駆け抜けた。

顔に冷たいものを感じた。途端に夏の名残りの日差しに焼けたアスファルトが濡れて湿った土臭いにおいが立ち上りはじめる。

あと少しで家なのに。

しかし、手の甲や頬、首筋に空から降ってくる幾筋もの重い水滴が容赦なくぶつかって弾けていく。

あつという間に雨の幕に包まれてしまった僕は路肩に駐車している軽自動車进行を何とか避け全速力でマンションの敷地内に駆け込み自転車置き場の壁にぶつけるように自転車を突っ込んだ。

頭上に鞆をかざしながら建物に逃げ込んだときには手で払っても焼け石に水というぐらいに服が濡れてしまっていた。ズボンからハンカチを取り出して顔を拭おうかと思ったが面倒になって階段を駆け上がった。

ドアに鍵を差し込んで違和感を覚える。

鍵を開けなくてもノブを回すとドアは簡単に開いた。

中を覗くと父親の革靴の隣に見慣れない女性もののパンプスが並んでいる。

「雨に降られちゃったでしょー」

僕は廊下の奥からスリッパを鳴らして駆け寄ってくる人に目を凝らした。

母さん。

母さんが僕の手にはタオルを握らせる。そして自分でもタオルを使って僕の頭や肩を拭ってくれる。

不意に目頭が熱くなって視界が霞む。髪から伝う雫が目に入りぼやけて見えるのか。

僕は洗剤の匂いがするタオルに顔を押し付けた。

「早く着替えてこい。風邪ひくぞ」

顔を起こすとワイシャツにスラックスという最近あまり見ることのなかったこざっぱりした格好の父が立っていた。その横にいるのは……坂本先生だ。

「先生」

僕はどうして坂本先生を母さんに見間違えたのだろう。病院にいる母さんが家でこんな風に出迎えてくれるはずなのに。

「今日はたまたま仕事の都合がついたから先生に家庭訪問に来ていただいたんだ」

父の言葉はどこか言い訳がましく聞こえた。

時間ができたのならまず何をおいても母さんの見舞いに行くべきじゃないか。そう言いたくなったが、僕の進路面談のために時間を割いてくれたのだからと思うと頷くしかなかった。

坂本先生はリビングに入っていたかと思うと鞆を手に戻ってきた。

「では、私はそろそろ失礼いたします」

「あ、ああ。そうですか。今日はご足労いただきましてありがとうございます」

父と坂本先生が話しているのを見るのはどこか不思議な感じがした。

当然ながら二人とも僕はよく知っているが、父は家の中、坂本先生は学校でしか存在せず登場がシンクロすることはなかった。それが今、僕の目の前で二人が会話している現実にくまなく僕がフィットできていないようだ。

「いえ、とんでもございません。私の方こそ忙しいのに貴重なお話を聞かせていただきましてありがとうございます」

「よろしければ、発掘現場の方へもお越しください。案内させていただきますので」

「ありがとうございます。ぜひ、よろしく願います」

頭を下げ合う二人の大人。僕はタオルを使いながら部外者の感覚でそれを眺める。

社交辞令の応酬。空虚な芝居臭さ。「そろそろ時間だから帰るね」「じゃあな」で終わることにどれだけ時間をかけるのか。大人になれば僕もこんな風に口先だけの言葉のやり取りのスキルが身につくのだろうか。

「雨、降ってますけど」

僕も大人のやり取りにそろりと顔を出した。言ったらまた一しきり芝居続行となるのは分っていたけど、ずぶ濡れで突っ立っているのに指摘しないのもおかしいかなと思って。

「あ、そうだった。先生、雨が止むまでもう少しゆっくりしていかれたら」

「お気遣いありがとうございます。でも今日は車で来ておりますので大丈夫です。まだ仕事も残っておりますし」

「そうですか。それではお氣をつけてお帰りください」

にじるようなゆっくりとした動き。二人が息を合わせて玄関に近づいていく様は見事だった。

ドアが閉まるまでいったい何度お辞儀をし合っただろう。大人って面倒くさい。

僕は髪から滴る水の流れをタオルで拭いながらリビングに入った。

いつもと違う匂いがあった。坂本先生の残り香だ。

学校ですれ違う時には何も思わないのに、ここで嗅ぐと何となく大人の女の艶めかしさが感じられるようで僕は慌てて自分の部屋に逃げ込んだ。

休日の昼間に父親が家にいる。

それは当たり前のことのようでもあるが、その現実に対して何となく構えている自分がいる。

発掘に駆り出される前の状態に戻っただけなのに、どこか自然に振舞えないのは何故だろう。

慣れの問題だけなのだろうか。家族とさえど一年のブランクというのは一足飛びには埋めることができない時間ということなのかもしれない。

「このグループ、人気があるのか？」

昼ご飯に僕が作った焼きそばを頬張りつつテレビに視線を送りながら父が訊ねてくる。

映っているのは僕とそんなに年齢の変わらない女の子十人で構成されている最近売れ出したアイドルグループだ。どの子も激戦のオーディションを潜り抜けた自信とプライドが窺い知れる磨き上げられた笑顔を振りまき飛び跳ねながら歌っていた。僕は彼女たちの名前と顔が一致しないのだが、クラスの中では「あの中で誰が一番可愛いと思う？」「そうだなあ、俺はやっぱり……」という会話が頻繁になされている。

それにしても以前の父はこんな実のないことを僕に訊いたのだろうか。

そして一年前の僕は父に返答することがこんなにも面倒臭いと思っただろうか。

「知らない」

自分でも驚くほど乾いた返事。口にしてみると一年前まではこんな口のきき方をしたことはなかったということがはつきり理解できる。

向かい合っている父も驚いたのかテレビから僕の顔に視線を移し

てきたのが目の端で分かった。僕はキュツと胃が窄まるような感覚を覚えながらその視線を無視して焼きそばを噛み潰し続けた。

やはり何かが違う。

この一年間で僕の内面が反抗的で自立的な成長を遂げたのか、それとも子供の親離れに父の気持ち追いつかないのか。とにかくくしゃくしゃした余所余所しい会話と、外のうだるような暑さとは裏腹の肌寒く重い空気はどうにも居心地が悪かった。

そのとき家の電話が鳴った。

固定電話に掛かってくるとすれば父の仕事の関係か、そうでなければ化粧品や教材の押し売り勧誘だ。どちらにせよ僕には関係ない。それでもこれまでの習性で出ようかと思っただけ僕が箸を置くと父がお茶でのどを通し、僕を手で制して立ち上がった、

僕は受話器を上げる父の背中を見ながら静かにだが大量に肺の奥から空気を吐き出した。

どうにも息が詰まる。

発掘が新たな展開になったから今から来てくれ、という内容の電話ならいいな。そうでなかったら図書館に行つてくるとでも言い繕つて外に出よう。受験生には勉強という大義名分がある。

しかし、父は「ちよつと待ってね」と軽い口調で相手に告げ、あっさり保留ボタンを押して意味ありげに口元を歪めて僕を振り返つた。

「光太郎、お前にだぞ。女の子から」

一瞬にして顔から火が出た。焙られたように顔が熱い。

女の子から電話が掛かってくるなんて人生初だ。

誰だろう。どんな用件だろう。

しかし、携帯にではなく固定電話にというのが良く分からない。今度はなおさら父の目を見ることができず俯き加減で電話の前まで行く。

コードレスの受話器を取り、上ずる声で応対すると相手は西堀と名乗った。全くピンとこない。

「西堀さん？えつと……」

「この夏から美術部の部長をやらせてもらってます」ということは二年生か。

真面目に美術室に出入りしていれば文化部と言えど同じ部内だから違う学年でも交流はあるのだが、熱心とは程遠かった僕は同年度の部員ですら大した会話をした記憶がない。見れば思い出すかもしれないが西堀という名前と声だけでは彼女のことは何の印象も浮かんでこなかった。

うちの電話番号はおおかた部員名簿で探したのだろう。それにしても部長さんが引退した幽霊部員の僕なんかにどうして電話を掛けてくるのか。

僕の背後で父が焼きそばを啜る音がする。僕は子機を耳にあてたままりビングを出た。

「俺に何か用？」

「すみません、突然お電話なんかしちゃって。少し伺いたいことがあったんですけど、でも学校で三年生の階に行くのってかなり勇気が必要で」

それは理解できる。

中学生にとって一歳の差は絶対的なもので、違う学年の領域に乗り込むのは敵地に足を踏み入れるような感覚になる。降り注がれる視線は鋭く冷たい。その疎外感たるやまさに針のむしろだ。

「そりゃそうだね」

「はい。それで、あの……」

彼女が黙ってしまったって妙な間ができあがり僕を動揺させる。だからと言って沈黙の理由が分からなければ掛ける言葉も見当たらない。彼女がわざわざ電話をしてきたのは何のためだろう。

僕は自室に入り後ろ手で静かにドアを閉めた。

僕に告白？まさか。

しかし、一旦辿りついてしまったその思考に僕の心は勝手に高揚した。高鳴り出した胸のドキドキが受話器越しに聞こえてしまつて

いないだろうか。

好きです、先輩。

そんなこと言われたらどうしよう。西堀、西堀……。かわいい子かな。

いくら不真面目だったとは言え全く参加していなかったわけではないのだから美術室内で顔を合わすことはあつたはずだが……。大所帯でもないのにやはり何も思い出せない。

今日の電話での受け答えだけ取ってみれば丁寧な口調から悪い印象は全くない。とりあえず会ってみて…。

「佐伯さんって知ってますか？」

「佐伯？」やっぱり僕に告白ではなかったようだ。背骨を抜かれたように力が抜けて僕はベッドに転がり込んだ。仰向けに寝そべると投げやりな声が出てしまう。「同じクラスだから、そりゃ知ってるけど」

そう言えば佐伯とは梶田先生を探しに美術準備室に同行したとき以来ろくに話はしていない。その後どうしているのだろうか。

美術室を使わせてもらいたいと願い出て、梶田先生も案の定二つ返事であつさり許可していたが。美術部の部長から佐伯の名前が出てくるということは本当に部活に参加しているということなのだろうか。

「どういふ人ですか？」

「どういふって言われてもなあ」

彼女が転校してきてからまだ半月ほどしか経っておらず、彼女について何かを語るほどの知識は全くない。強いて言えば何を考えているか分からなくて怖いということなのだが、そんなマイナスイメージは伝えづらい。

「会話されたことあります？」

「少しだけ」

「普通ですか？」

ものすごく曖昧な問いかけにどう答えたものかと逡巡する。

佐伯との数少ないやり取りを思い出してみると僕の中での普通の定義からはかなりはみ出しているような気がするが。

「普段は無口で外見は少しとっつきにくい感じはするけど、話せば結構フランクだよ」

モノは言いようだ。受験生にもなるとこつという言い回しができるようになる。

「そうなんですか。良かった」受話器の向こうから、少し安心した、という感情が伝わってきて、逆に僕は若干不安になった。「佐伯さんって見た目的に怖そうな感じがしたんで、ちよつとほつとしました」

やっぱり。

僕の雅な表現の仕方では彼女のサディスティックで強引な性格を包みこんだオブラートがちよつと厚すぎたようだ。

「何かあったの？」

「あのですね……」言にくそうに口ごもる。「最近ちょこちょこ放課後に佐伯さんが美術室に現れるんです。それで二時間ほど絵を描いていかれるんですけど、その、ちよつと……」

「ちよつと、どうしたの？」

「私は別にいいと思うんですけど部のイーゼルを使つてらっしゃるんです。あと準備室に置いてある部員の画材を勝手に使ったりも。

挨拶して無視されたつて言う子もいます。それで部員から、部長なんだから一言言ってくれつて言われて正直困つちゃつて……」

「なるほど」

僕は思わず唸つた。さもありません。

佐伯は周囲の気持ちを忖度するという面が欠けているように思う。きつと彼女にも他の生徒をないがしろにするつもりはないのだろうか。けれど。

「こんなこと言つたらなんですけど美術部の部長つて運動部の部長と比べると形だけのもので大した役割ないじゃないですか。やることつて言つたら部費と美術準備室の鍵の管理ぐらいで。だから軽い

気持ちで引き受けたんですよ。これで内申点が上がるのならラッキーかもみたいな感じだったんです。だから部長になって早々にこんな事件が起きるなんて思ってもみなくて。だから私……」

僕は受話器を耳から少し離れた。

西堀は喋り好きなのだろう。僕はまだ打ち解けたつもりはないのにベテランの講師のように息つくことなくどんどん言葉を浴びせてくる彼女の声が少し耳にうるさくなってきた。だからと言って無下に電話を切ることもできない。

僕はベッドから身を起こした。

事件という表現はちよつと大げさな気もするが、彼女の我が身の不運を嘆く気持ちは理解できる。相手があの佐伯でさえなければ彼女にとつても「事件」とまではならなかったのかもしれない。

僕だつてクラスメイトでありながら佐伯に話しかけるのは勇気が要ることであれば避けて通りたい。僕が西堀の立場だつたらと考えると背中が寒くなるようだった。

それに女の子と電話をする機会なんて初めてのことで、異性とのコンタクトに免疫がない僕にとつてはこれは非常に貴重な経験であることは間違いない。しかももし西堀がそれなりのルックスだったとしたらここで彼女と仲良くなつておくことは僕に残された中学生生活において損であるはずはない。

お喋りは女性共通の特性なのかもしれない。少しぐらい耳がキンキンしたつてここはひとつ先輩として彼女の悩みを真剣に受け止めてあげよう。

「……そうしたら仁科が何とかしてくれるつて」

「は？俺が何だつて？」

彼女の話に注意を戻した途端に僕の名前が出てきて僕は思わず声を出していた。

「もう。先輩、私の話聞いてくれてました？」

「もちろん聞いてたけどいきなり名前を呼ばれたからちよつとびっくりしちゃつて。ハハハ……。で、どうして俺が出てきたんだっけ

？」

「いきなりじゃないですよ。ですから、困って梶田先生に相談してみたんです。いくら幽霊とは言え一応美術部の顧問なので。そうしたら梶田先生が一言、佐伯を美術部に勧誘したのは仁科だから仁科が何とかしてくれる、って。だから今日先輩に電話してるんです。お願いします。何とかしてください」

「ちょ、ちよつと待つて。俺は別に佐伯を勧誘なんかしてないって」それは間違いない。佐伯に脅されて梶田先生の所まで案内させられただけだ。

「でも、先生は先輩が佐伯さんを連れてきたって言うてましたよ」それはそうだけど」

「こんなこと言ったら失礼かもしれないですけど、美術部OBとして勧誘なさった以上先輩にも責任があると思うんです」

電話なのに実際に目の前で西堀から詰め寄られているような圧迫感を受ける。僕はその、後には退けないという部長の使命感のような気迫にたじろいでいた。

責任ねえ。

思いがけず後輩から突き上げを食らい突然中学生にはなじみのない言葉が僕の心に重くのしかかってきた。僕は生れて初めて他人のことに對して責任を果たさなくてはいけなくなってしまうたようだった。

車の中で父がカーステレオに合わせてお気に入りの懐メロを口ずさんでいる。

父の横でこれまでも何度となく聞いてきたその退屈なメロディーが今日の僕にはどうにも耳触りで仕方がない。歌のテンポがいけないのか、父のお世辞にも上手いとは言えない唄声が気に食わないのか。先ほどの西堀からの電話でブルーになっていた僕はとにかくイライラしていた。

息がつまりそうだがクーラーを掛けているから窓を開けるわけにもいかない。当てどなく窓の外に目をやりながら花屋で買ったバラの花束を握る手に力を込める。

漸く駐車場に到着する。父より先に車から降りると僕は深く息を吐き出しのっそり出てきた父の前に立つて歩いた。先導するためではない。父の顔を見なくて済むからだ。

毎日のように通っている病室までの階段や廊下も父と一緒に何かが違う。親と歩くのが気恥しい感じがしてどうしても足早になってしまう。しかし、父は僕の気持ちも知らずにゆっくりと歩く。何となく足取りが重いように見えるのは単に僕の気が急いているからだろうか。

ノックして病室に入ると母さんはベッドにちょこんと座っていた。膝の上に置いていた雑誌を仕舞いこちらを見て小さく口角を上げて微笑む。

「いらつしゃい」

母さんの所作や声がどことなくどこちなく他人行儀に見える。何故だろう。いくら夫婦でも久しぶりに会うと肩肘張ってしまうものなのだろうか。

「調子はどうだ？」

父がお決まりの言葉を口にする。

「うん、ぼちぼち。それにしてもすごい日焼けねえ。まっくろ」

「そうか？それでも最近は現場に出ることが減ってましになったんだけど」

「少しは休めるようになったの？」

「ああ。だから今日はこうやってここに来れた」

「そうね。ありがとうございます」

「いや、別にそんな・・・」

先ほどから両親は目を合わせようとしない。会話も上辺だけでまるで用意された台本をなぞっているようだ。しかし、そのやりとりがどちらかだけ空回りするということがないのはさすがに何年も連れ添った間柄のなせる業と感心する。

それにしても明らかに余所余所しい空気は二人の子供という立場の僕には少々いたたまれない。

「座ったら？」

母さんがベッドの横を指さす。

「あ？ああ」

父は初めてそこにパイプ椅子があるのを知ったかのような顔つきで母さんの横に腰を下ろす。しかし夫婦の間には会話が生まれない。僕がいるから水入らずとまらないのだろうか。

「活けてくる」

僕が花束を持った右手を軽く上げて枕もとのガラスの花瓶を掴むと慌てたように父がサッと立ち上がる。

「俺が行ってこようか」

「そんなのいいよ。いつもやってるし。座ってて」

「そうか」

父が所在なさそうに再び腰を下ろす。

「き、きれいなお花ね」

「あ、ああ。最近はバラの色も種類が多くなってるんだな」

いったいどうしたのだろう。前からこんな感じだったっけ。僕は病室から出るときに一向に打ち解けない様子の両親を見やって小首

をかしげた。

部屋に戻ると、とうとう二人は黙ってそれぞれ自分の手を見下ろしていた。今さら自分の指の形や甲に浮き出ている血管に興味なんかないだろうに。

「昨日は夕立が降ってきて大変だったよ。びしょ濡れになっちゃって」

どうして僕が気を遣って話題を提供しなくちゃいけないんだ。それともこれは余計なおせっかいなのだろうか。

「そうそう。眠る前にすぐ雲行きが怪しくなってたから心配だったのよ。やっぱり降ってきたのね。自転車で帰ったの？滑って転んだりしなかった？」

母さんが少し眉間を曇らせて僕を見上げた。

「道路は空いてたから逆に安全だったよ。問題なし」

「そう言えば、昨日光太郎の担任の先生が家庭訪問に来たんだ。今の成績ならK高校は大丈夫だとさ。実力テストの結果は文系科目が少し物足りないって言ってたけど」父が厳めしい顔つきで僕を見る。「苦手なのか？俺が教えてやろうか」

急に饒舌になった父が鼻を膨らませる。

学芸員になるぐらいだから父はきつと文系科目に自信を持っているのだろ。留学経験もあるらしいから英語だってそこそこの喋ることができるとはでないか。

「たまたま調子が悪かったただだよ」

本当は毎回国語や英語の点数が低迷していて足を引っ張っているのだが父に教わるのだけは避けたい僕は逃げを打った。

しかし、今後高校に行って理系を選択したとしても英語は重要科目だから何とかしなくてはならない。今までは何となく毛嫌いしていて勉強に身が入らない英文法だったが、父がしゃしゃり出てくる前に今日からは気合を入れて取り組むことにしよう。

「担任の先生って坂本っていう女性の方だったかしら？」

坂本先生の話をしたことあったっけ。母さんが覚えているという

ことは母さんとの会話の中で軽く登場したのだろう。相変わらず母さんの記憶力の良さには舌を巻く。

「そうそう、その坂本先生が転入生のこと言ってたな。光太郎が美術部でその子も美術部に入りたくて光太郎が優しく相談にのってくれたから助かったとかつて。お前、美術部だったんだな」

僕は暗澹たる気分になった。誰がいつ優しく相談にのって佐伯を助けたつて？

「あら、そう。その子って女の子？」

母さんが今日初めて母さんらしい柔らかい表情を見せる。僕の顔に浮かぶ表情の変化を見逃すまいと目を大きく見開いて。

「そう言えばさっき女の子から電話があったよな。西堀とか言ってたけどその子か？」

父がいたずら好きの子供のように僕に訊ねるふりで母さんに告げ口をする。

ああ、面倒なことになってきた。母さんは頬を光らせてさらに強く僕に詰め寄る。

「え、そうなの？光太郎に女の子から電話なんて今までもあったの？」

「俺は知らないな。おい、どうなんだ？」

ようやく夫婦らしいがつちり噛み合った連携を見せて一人息子からかう両親を前に僕は羞恥心で顔が熱くなるのを止められない。何でも良いからとにかく否定しないと。

「そんな電話ないよ。今日のも部活の事務連絡。西堀は一つ年下で今年から部長やってる子なの」

強い口調で説明しても二人はにたと笑うだけだった。

「お前、部活って三年の夏なんだからもう引退したんじゃないのか？」

「引退したのに掛かってくるなんて、何かあったの？」

僕はぐつと息を詰まらせた。先ほどまではぎくしゃくしていたのに二人のこの息の合いようは何なんだ。

「その転入生の件だよ。三年なのに今頃に入部してきたからどう扱っていいのかわからないみたいで」

「ふーん。で、その転入生は女の子？」

ここで本当のことを言ったら事態の收拾は覚束ない。「名前は何ていうの?」「外見はどんな感じ?」などとさらなる質問攻めが繰り返されるのは火を見るより明らかだ。

「男だよ、男」

僕はシッシと追い払うように断言した。言ってから父は坂本先生から佐伯が女子であることを聞かされているかもしれない思ったが、知っているなら既に母さんに教えているはずだと僕は心の中でその可能性を否定した。

「本当にい?」

母さんは楽しくてたまらないという感じで聞き分けのない幼児のように執拗に食い下がってくる。

「本当だよ」

言い捨てると僕は母さんに背を向けて備え付けの冷蔵庫から麦茶を取り出しグラスに注いで一気に飲み下した。

授業が終わり気だるそうに鞆をぶら下げて教室を出ていく佐伯の背中をこっそりと僕は追った。

長い髪を軽く揺らして廊下の中央を闊歩する佐伯。まるでモデルが花道を歩くように堂々と一定のスピードを保って突き進む。彼女の前に立つのを怖れるかのように同学年の生徒たちが次々と脇に寄っていく。

彼女の人を寄せ付けないオーラは後姿を見ているだけでもビリビリと伝わってくる。僕の足取りは一步一步重量感を増していった。

あの佐伯に話しかけて部活動の何たるかや集団行動でのマナーを説かなくてはならないのか。

僕は身の丈に合わないひどく大それたことをしようとしている気分だった。卒業式で訓話する校長のマイクを奪い全校生徒の前で漫談をやるだとか職員室に単身乗り込んで梶田先生に「その服どこで売っていくらで買ったんですか？」と笑いながら訊ねることの方がまだ簡単に違いない。果たして僕にそんな胆力と能力が備わっているのだろうか。

彼女に声を掛けるタイミングを計るところか見失わないようについていくだけで息が切れてくる感がある。そんな僕にはこの距離を詰めて彼女の肩を叩きこちらへ振り向かせることなど沙織とデートすることより不可能なことのように思える。

彼女は迷いのない足取りで階段を上がっていく。

この棟の三階には美術室がある。彼女は今日もそこでキャンバスに対面するつもりなのだろう。

一段一段上るたびに張りりと弛緩を繰り返す彼女のふくらはぎの肉感的な動きは父が日曜に見ていた競馬中継のサラブレッドの四肢を彷彿とさせる。膝裏の青みがかかった血管が透けて見えるような白さはいやに扇情的だ。

フェチという言葉を目にすることがあるが僕は自分が女性のその部分にフェティズムを感じるのかもしれないと思いつて何となく自己嫌悪を覚えた。性的興奮を肯定的に捉えられない心理は僕がまだ子供だということなのだろう。

そんなことをぼんやり考えているうちに彼女はさつさと階上に消え姿が見えなくなってしまった。僕は慌てて彼女を追いかけた。

階段を上り切り美術室の方へ廊下を右に曲がったところで僕は真横から声を掛けられた。

「何か用？」

ひっ。

僕は声にならない声とともに飛び上がって驚いた。その拍子に彼女がもたれているのとは反対側の壁にしたたかに肩をぶつけて思わずうずくまる。

小さく呻きながら痛みの中で僕は自分の腹が据わるのを感じていた。彼女は僕が後を追っていることに気づいていたようだ。この状況を取り繕う言い訳など何も見当たらない。この場を逃せば西堀に求められたことを達成することはもう無理だろう。とりあえず動揺している心臓の動きを勢いに変えて一気に彼女と対峙してしまおう。僕は鈍痛の残る左肩を抑えながら彼女の眼前に立ち上がった。

「あのさ・・・」

僕が腹を据えて口を開くと佐伯は冷ややかな視線で僕を射すくめる。あまりの冷たさに僕は泡を吹いて気を失いそうだ。

「昨日も、一昨日もあたしをつけまわしてたでしょ」

良くご存じで。心当たりがありすぎる僕は後ろめたさで途端に彼女の顔を正視することができなくなった。

昨日や一昨日だけでなく金曜日の今日まで今週は毎日話しかけるきっかけを求めて僕は彼女を追いつけていたのだった。

西堀に期限を設定されていた。

今週中になんとかしてくださいね。

言葉は丁寧だが彼女の口調には反論は許さないという断固とした

強さがあつた。できなければ身の安全は保障しませんよ、と鋭利なナイフで顔を撫でられたような気分だった。半ば一方的に電話を切られてしまつてから僕はあつという間に過ぎ去つていく一日一日を追ひ立てられるような気持ちで過ごしていたのだ。何で俺が、と考えないわけではない。放つておけば良いじゃないか。そうは思つても目ではずつと佐伯を追つてしまつていた。

「ストーリーカー？」

佐伯が気持ち悪いものを見るように顔を歪めるのを目の当たりにして僕は屈辱的な気分 zu 全身をわなわなと震わせた。全てはお前のせいだ。それなのにその態度は何だ。

「違う！」唾を飛ばしながら僕は身体を熱くする。僕は男として最も恥ずべき汚名に発奮しやつと佐伯の目を見返すことができた。「言つておきたいことがあるんだ」

「何よ」

訝るような低く冷たい声の佐伯はまだ僕をストーリーカーと思ひ込んでいるようだ。腕を組んで斜に構える彼女の心は非常に遠くにあることが分かる。千里の道も一歩から。とにかく一歩踏み出すことが大事だ。踏み出しさえすれば後はその繰り返しなのだから。

「今日も美術室で絵を描くのか？」

「そのつもりだけど、そんなこと美術部を辞めた人に関係ないですよ」

「それがあるんだよ」

「どうして？」

「どうしてつて佐伯は美術部員じゃないのか？」

「カジカジには認めてもらつたわよ。それは光太郎だつて知ってるじゃん」

「だったらOBの言うことは聞いてもらわないとな」

「何それ？意味分かんない」

佐伯が面倒臭そうに眉間を曇らせ目を細める。

「部員にとつてOBの言葉は絶対だ。それが部活動つてもんなんだ

よ」幽霊部員だった自分が部活動について語っているなんて僕が一番驚いていた。しかも口から出てくる理屈が筋が通っているのか甚だ自信がない。それでも言ってしまった以上後戻りはできなかった。僕はあるのかどうか分からないOBの威光を笠に着ているつもりで言葉を続けた。「部活動は礼に始まり礼に終わる。佐伯は美術室に入るべき、出るときに挨拶をしてるか？」

「そんなことを言いたくてストーカーしてたの？」

呆れたようなため息交じりの声。

「だから違うつて。挨拶の話は例えばってこと。部に入ったんなら部員同士仲良くするのは当たり前だろ。美術部は一人でやってるわけじゃないんだ。部長や部員に自己紹介ぐらいしたのか？」

「絵を描くのは個人。自分以外他に誰もいらさない。あたしに指導できそうなのレベルの人はいないし、話し相手がほしくて美術部に入ってたわけじゃないんだから今のままで何の問題もない」

佐伯が低い声で押し通す主張に思わず頷いてしまいそうになる。

しかしここが踏ん張りどころだ。

「佐伯に問題がなくても周りは問題だと思ってるんだよ。佐伯が美術室で使ってる画材は部員がお金を出し合って買ったものだ。部費は払ってるのか？誰の許可をもらって画材を使ってる？美術部には美術部なりのルールがあるんだよ。それが守れなきゃ部員じゃないし、部員じゃなければ放課後に美術室は使えない」

言い終わった後の声の響きに爽快感があった。ストーカー呼ばわりを辞めさせたい一心で思いつくままに言葉をつないだが、佐伯相手にこれだけ開き直れるとは思ってもよらないことだった。これだけ言えばさすがの佐伯も少しはしゅんとなって可愛げのあるところを見せるのではないか。

「くっだらない」

へ？

「あたし、美術部辞めるわ。誰に唆されたのか知らないけど光太郎も御苦労さまだったわね」

手をひらひらと軽やかに揺らし余裕の頬笑みを残して彼女は僕に背を向け階段を降りていった。

こんな展開になるとは。

部費は幾らなのか。部長は誰がやっているのか。

あれだけ言えばそういつた美術部に在籍し続けるための質問が返ってきて当然だろう。そう思い込んでいた僕は返す刀でばつさりと袈裟掛けに斬られたようなぐうの音も出ない敗北感にしばらく呆然と立ち尽くすだけだった。

千里の道は途中で途絶えていたようだった。気が付けば踏み出した足を置く場所がなく暗闇の奈落に真つ逆さまだ。

どれぐらい僕はばうつとしていただろう。真つ暗闇の中にいると思っていたがいつの間にか目の前には校舎の白い壁があった。当然ここは美術室前の廊下だ。

とりあえず、だ。とりあえず責任は果たしたと思えば良いだろう。西堀が求めている結果には至らなかったが、佐伯が部を辞めれば彼女が部員から責められることはなくなるのだから彼女もほっとするに違いない。

僕もこれ以上佐伯のことで誰かに何かを求められるという事態は降りかからないという意味ではこの展開は成功だったのではないか。

そうだ。そうに違いない。

僕はようやく自分なりに状況を良い方向に解釈することができて顔を起こした。

そこへ不意に背後から何かがぶつかってきた。その衝撃に膝から崩れそうになって慌てて壁に手をつき身体を支える。

「佐伯と何話してたんだよ？」

振り返ると陽平の顔がそこにあった。いつから居たのだろうか。お前も隅におけないな、とにやけた口角のあたりが言っている。

「別にたいしたことじゃないよ」

「そんなことないだろ。佐伯が行っちゃった後のお前は完全に腑抜

けになってたぞ。振られたのか？」

「そんなんじゃないっ！」

ストーカーの次は失恋男か。馬鹿馬鹿しい。

僕は何もかもが面倒になって陽平を置いて階段を降りていった。

今の僕はこの場に倒れこみたいほどクタクタで口をきくのも億劫なくらいなのだ。

慌てた感じで陽平が追いかけてくる。

「怒んなよ、光太郎。悪かった、冗談だっつて」

「別に怒ってない」

反射的にそう言ったが頭はカッカしていて鼓膜のあたりがぼわんとしている。

「見るからに怒ってるよ。お前にしては珍しく」

「陽平がからかうからだろ」

「だから悪かったっつて」

階段の踊り場で僕は大きく深呼吸した。

少し冷静になろう。陽平と喧嘩しても仕方がない。

「佐伯が美術部に入りたいって言うから顧問のところに案内したんだけどさ」

僕は歩きながら陽平に事の成り行きを説明した。しかし喋っているうちにまた胸のあたりに血が滾ってくるようだった。

西堀の責任転嫁する強引さ。佐伯の人を小馬鹿したような態度。

女子というのは皆どうも鼻持ちならない存在に思えてくる。

「そっか。そりゃ、俺でも頭にくるわ」

「だろ？ほんとむかつくんだよ」

僕は激しく陽平に同調した。

やっぱり男は話分かる。陽平がそう言うのだから僕が憤るのは間違っていないのだ。西堀に対しても、佐伯に対しても。

「でも良かったよ」

陽平が前を向いたまま安心したように表情を緩める。

陽平が良かったと思うのならきっと僕も良かったと思うだろう。

そう思わせるほど陽平の笑顔は尊さを感じさせる。

「何が？」

「光太郎が佐伯のこと好きじゃなくて」

「どういうこと？」

「もしそうだったとしたら、俺と佐伯が付き合うことになったら、光太郎が可愛そうじゃん」

「は？」

「いや、俺、最近佐伯のこと良くなって思ってた気になってるんだ」
えー！

僕は思わず立ち止まって声を上げていた。驚きだった。陽平が佐伯のことを好きだということ、陽平が沙織のことを好きじゃないということに。

「声が大きいって」

陽平が手で僕の口を押さえるような仕種をする。その顔が朱に染まっていた。

陽平は本気なんだ。そう思ったとき僕は一つの疑問を口にした。
た。

「沙織はどうするの？」

「どうして沙織が出てくるんだ？」

陽平がきょとんとした表情で首を傾げる。

「だって、陽平は沙織と付き合ってるんでしょ？」

「は？付き合ってたええよ。どうしてそうなるんだ」

陽平はいかにも心外という感じで吐き捨てるように否定した。

しかし、陽平と沙織が恋仲だというのは学年の常識のようなもので、そう思い込んでいたのは僕だけじゃないはずだ。仲良さそうに話をしている二人を見て悔しいけれどお似合いだと校内の至る所で囁き合っているのを耳にする。

あの親密な様子で付き合っていないのだということなら僕の中の「お付き合い」の定義が根底から揺らいでしまう。

果たして沙織は陽平のことをどう思っているのだろうか。彼女の

方は付き合っているつもりなのではないだろうか。

「さては、光太郎」

「何？」

「お前、沙織のこと好きなんだろ」

今度は僕の顔が赤らむ番だった。

沙織のことは可愛いと思うが、好きという感情にまで至っているのかどうかは自分でも分からない。しかし、面と向かってそう言われると恥ずかしくて身体が熱くなる。

「そうかそうか。よしよし、俺が何とかしてやるよ」

何が嬉しいのかにたにた笑って陽平が僕の肩を抱く。

「いいつて、そんなこと」

僕は慌てた。何かにつけて積極的な陽平には分からないだろうが、こういうことは人知れず慎重に動きたい。ましてや今は自分の気持ちもはっきりしないのに自分以外の人間に勝手なことをされてははっきり言って迷惑だ。

「遠慮するなつて。任せとけよ」

僕から逃げるように陽平が後ろ歩きで小走りしながら下駄箱に向かう。

「違っんだつて、本当に」

僕は何故か楽しそうな様子の陽平を追いかけてその肩越しに下駄箱にもたれている意外な人物を発見した。

長い髪。すらりとしたスタイル。僕は思わず表情を強張らせて足を止めた。

僕の視線を感じて陽平も立ち止まり背後を振り返る。彼も瞬時に四肢を硬直させたのがその背中からビリビリと伝わってくる緊張感で如実に掴めた。

「ちよつと話があるんだけど」

暗く鋭い目つきは完全に僕を捉えていた。ここで先ほどの続きをやるうというのか。

僕は全身の肌が粟立つのを感じた。彼女はきつと僕の言動を思い

出し腹に据えかねてここで僕を待ち構えていたのだろう。そして僕をこの場で八つ裂きにして血祭りにあげるつもりなのだ。僕は自分の首が白木の台にちんまりと載せられ玄関前に晒されている様子を想像して身震いした

「な、何ですか？」

声が喉に引つかかって上手に出ない。完全に不意を突かれた格好の僕は何の心の準備もできておらず思わず下手に出てしまった。こうなったら手は一つだ。三十六計逃げるに如かず。僕は逃走経路のイメージを頭の中で作り上げながら彼女が何を言い出すかその口の動きに注目した。

「このあたりで画材ってどこで売ってるの？」

彼女が視線を翳らせ苦り切った表情で呟いた言葉は彼女の口の動きに傾注していなければ聞こえないぐらいの小さな声だった。

地味だったろうか。

僕は自分の身体を見下ろして何度目かの溜息をついた。

何の面白味もない白地のアデイドスのＴシャツにジーンズ生地ของハーフパンツ。まだ暑いからと足を出してみたのだがにゅるっと伸びた生白い脛が、そこにまばらに生えているすね毛ができそこないの大根のようで貧相に見える。スニーカーはお気に入りのニューバランスだが、通学にも使っているので薄汚れていてどうにも冴えない。

仕方がない。

昨日、急に佐伯と画材屋に行くことが決まって服を買いに行っている時間がなかったのだ。

そういう言い訳で自分を納得させてとりあえず今のところは待ち合わせの駅の切符売り場前から逃げ出さないでいる。

時間的に余裕があったとしても恰好良い服装を調達できたかどうかは甚だ疑問だった。どういったものが女子に受けが良いか皆目見当がつかない僕が時間に追われ一人で買い物に出かけあれこれ手を出したところで良い結果につながるとは思えない。普段から外見にもう少し気を遣っていればこういうことにはならなかったのだが。

せめて靴紐ぐらいは、としゃがみ込んで一度ほどいてからきれいに結び直す。ここに来て三度目の仕種だ。

「仁科君、早いね」

呼びかけられてハツと顔を起こすとミニのワンピースから伸びた柔らかかそうな白く輝く脚が目に飛び込んできた。さらに視線を上げると……そこには沙織の笑顔があった。

「こ、こんにちは」

素早く立ち上がると頭がフラツとした。緊張で血の気が失せる。盆の窪辺りが寒くなる。気を抜けば遠のきそうになる意識の尾を必

死に手繰り寄せ何とか挨拶代わりに白目を剥くような状態だけは回避した。

これまで一緒のクラスになったことのない沙織と話をするのはこれが初めてだ。彼女が僕の名前を知っていたことが嬉しくもあり不可解でもある。

それにしてもどうしてここに沙織が？偶然？それとも……。

「私、隣のクラスの栗山沙織。今日はよろしくね」

ぺこりと頭を下げる。僕もつられて同じ動作をした。

「くえ？」

頭を起こすと同時に僕は思わず鶏が首を絞められたような素っ頓狂な声をあげていた。

事態をうまく理解できない。よろしく、ということは彼女も一緒に画材屋に行くということなのか。

佐伯が彼女を呼ぶはずがないから、誘ったのは陽平ということになる。何のために……と考えたところで僕はカツと胸から首筋が熱くなるのを感じた。陽平が言っていた「何とかしてやるよ」がおそらくこれなのだ。あの野郎、余計な真似を。

「顔赤いよ」

「そ、そう？」

僕と沙織は切符売り場とジュースの自動販売機のわずかな隙間に並んで立った。

「やっぱり陽平君はまだよね」

沙織が確認するようにあたりを見回す。僕は黙って大きく頷いた。腕時計を見ると待ち合わせの時間までまだ十分もある。時間にルーズなところのある彼が現れるにはまだ間があるはずだ。そう考えると沙織と二人きりの時間がすごく重いものに思えてきた。

沈黙が続く。秒針がゆっくりと進む。

沙織が現れてからのどが渴いて仕方がない。舌の奥が粘って声が渋滞してしまう。

陽平が現れるまでどんな会話をすれば良いのか。そして……。佐

伯が到着したらますます何を話せば良いのか分からない。こんなことなら僕も時間ぎりぎりに来れば良かった。

とりあえず自動販売機でコーラのペットボトルを買う。蓋を捻るといつものシュワツと炭酸が弾ける爽やかな音がしてそれだけで少し救われたような気分になる。何となく耳からの刺激で脳の動きが活性化された感じがしてくる。可愛いワンピースだね、ぐらいの月並みではあるが僕にとっては歴史的な褒め言葉がするりと口をついて出そうだった。

「私ね、陽平君のことが好きなの」

占いにはまってるの、程度の軽い口調で沙織はさらりと僕に重大なことを告白した。

「そうなんだ」

僕は一瞬蓋を開く手を止めたが、自然な相槌を打っていた。不思議と心は冷静だった。

やっぱりね、そりやそうだよ、という気分だった。悔しいとか残念とかいうネガティブな感情は一切なかった。気持ちいいぐらいの感覚すらある。

それはきつと僕が沙織に対して抱いていた淡い好意の正体が遠巻きに眺めて知っている彼女の外見に対してだけの薄っぺらい好感でしかなかったからなのだろう。テレビに映るアイドルに覚える気持ちと同じだ。僕はまだ栗山沙織という女性を確固として好きだと想っているわけではなかったのだと思った。それとも時間が経つにつれてこの告白がじわじわと麻酔が切れかけてきた傷口のように僕の心に痛みをもたらすのだろうか。

「だから、仁科君がもし私のことを・・・」

「違うよ」

「え？」

「陽平に俺が栗山さんのことを好きだみたいなことを吹き込まれたのかもしれないけど、それは陽平の早とちりと言つか一人合点なんだ」

僕はコーラを口に含む。冷たい火花のような刺激が喉を潤している。自棄に見えないようにゆっくりと口から離れたペットボトルの蓋を閉める。しっかりと閉めたペットボトルはうっかり手から滑り落ちても中身は一滴も零れることはない。

「そう。だったら私失礼なこと言っちゃった。ごめんなさい」

彼女は僕に深々と頭を下げた。背筋を伸ばしたきれいな姿勢で。

僕は誰かからこんなにきちんと謝罪されたことがなく、しかもあの校内一美人の栗山沙織に許しを乞われる状況に漸くあたふたと慌てた。

「ちよつと、そんなに謝らなくてもいいよ。元はと言えば陽平が悪いんだし」

顔を起こしても沙織は申し訳なさそうな顔を崩さなかった。九回裏にサヨナラエラーをしてしまった甲子園球児ぐらい悲壮感が漂っている。

「陽平君は悪くないの。昨日陽平君に誘われたときにメンバーを聞いて私が勝手に想像しちゃったの。私こそ一人合点」

「メンバーを聞いただけで僕が栗山さんのことを好きだと思ったの？」

「だって、陽平君は佐伯さんのことが好きなのにわざわざ私を誘うってことは、そういうことなんだろうなって」

「知ってたの？」

僕は思わずそう訊いてから、しまった、と唇を噛んだ。今、僕は陽平が佐伯に好意を持っているということを暗に認めてしまったことになる。しかし、引き金を引かれた銃弾のように一度発した言葉は取り戻せない。僕の不用意な言葉は沙織の胸に深く突き刺さったのだろうか。

「陽平君はサッカー馬鹿だから考えてることはすぐ分かっちゃうのよ。佐伯さんが転入してきてからあの人変わったもの。でもね、私の気持ちはそう簡単には変えられないのよ」

そう言って虚空を睨む沙織の顔は同学年とは思えないほどきりり

と引き締まっっていて格好良かった。これが人を好きになっっている人の顔かと思った。どこか不安げで、だけど退くことはできないという必死さと気迫が漲っているようだ。そこには男には真似のできない芯の強さがあるようだ。よくテレビ番組なんかで「男は女には敵わない」という言葉を耳にするけれど、その意味が分かったような気がする。

そして彼女の鋭い観察力と洞察力には脱帽だった。沙織は熱いだけでなく冷静さを兼ね備えている。

「ね、ね、ね。じゃあさ、じゃあさ」

急に彼女が何か楽しいことを思いついたようなキラキラ輝く瞳で僕の顔を覗き込むように見つめてくる。

「何？」

その上目遣いでまっすぐな瞳があまりに澄んでいて僕は初めて陽平に嫉妬を覚えた。至近距離でそんなに見つめてこないで。僕は目を合わせていると石にされてしまいそんな感じがして慌てて視線をずらす。畜生。目茶苦茶可愛いじゃないか。

「仁科君は佐伯さんのこと好き？」

「は？それはない」

僕は少し鼻白む思いでコーラをぐびぐび飲んだ。

あんな勝気な女、好きなはずがない。僕のことをストーカー呼ばわりしやがって。

そもそも何であいつの買物に付き合わなくてはならないのか。

陽平もあんな傲慢な女よりも沙織と付き合った方が楽しいに決まっているのに、本当に馬鹿だ。

「そっか、残念」

「どうして？」

「だって、もし仁科君が佐伯さんのこと好きだったら、佐伯さんを陽平君に取られないようにしたくなるわけじゃない？それって私と利害関係が一致するもん。仲間になれるところだったのに」

沙織と仲間か。それって悪くない。いや、すごく楽しそう。

僕はたった数分の会話で学年のアイドルとの距離がぐつと縮まった感じがして嬉しかった。沙織と恋人同士になるなんて想像するだけで気後れしてしまうが、彼女の方から仲間だって言ってくれるなら僕は喜んで彼女の援護射撃をするつもりだ。

僕は残ったコーラを一気に飲み干し清涼感たっぷりです。沙織に向き直った。

「俺、栗山さんのこと応援するよ」

「ほんと？ありがと！でも、仁科君は陽平君にも同じようなこと頼まれてるんじゃないの？」

陽平が僕みたいなイケてない凡人に何かを期待するはずがないし、もし頼まれたとしたら僕も何をしたら良いのか分からず困ってしまう。

「そんなこと言い出すような奴じゃないよ。自信満々だもん。それに陽平には栗山さんがお似合いだって。あいつなんかより断然」

僕の中の沙織のイメージが変わりつつあった。清纯派の世間知らずのお嬢様だと思っていたのだが、恋の駆け引きみたいなことに挑戦しようっていう姿勢は僕よりも断然大人だ。

しかし恋愛の成就のためにひたむきな姿勢を見せる彼女は僕の中で今までは違うベクトルにだがなお一層好感度が上昇した。

「あいつって？」

低い声に振り向くと自動販売機の陰からぬつと佐伯が姿を現して僕は背筋を鉄柱で貫かれたように直立不動で立ちすくんだ。今度こそ本当に石になりそうだ。まともに佐伯の顔を見ることができない。「い、いつ来たの？」

思わず訊いてしまった。

いつからそこにいたのか。どこから話を聞かれていたのか。

互いの心音が聞こえそうなくらいに隣り合っている沙織も表情を失っていて声を出すこともできないでいるようだった。

「今よ。時間でしょ？」

反射的に腕時計を見る。確かに待ち合わせ時間にジャストのタイ

ミングだ。

「丁度だね」

「ほんと、ぴったり」

ハハハ。フフフ。

僕と沙織は顔をぴくぴく引きつらせながら何もおかしくないのに見つめ合って笑い合う。互いに笑うしか術がなかったようで僕たちは何度も何度も頬の筋肉を持ち上げた。

挙動不審の僕たちに冷ややかな視線を送りながら佐伯はゆっくりと切符の券売機に向かった。

スキニーなジーンズに胸元が大きく開いたベージュのカットソー。色合いは地味だが彼女のスタイルの良い身体のラインをすっきりと見せていて中学生とは思わせない落ち着きが漂っている。

彼女と二人きりで買い物にならなくて良かったと心底思う。僕と佐伯が並んで歩いていたら道行く人にはどんな風に見えるのだろうか。本当にこいつ僕と同じ年かよ。

「いくら？」

値段を答えようとしたら胃の奥からコーラの香りの大きなげっぷが出てしまった。慌てて口を抑えるが時既に遅し。僕をストーカーと訝しんだときと同じ冷淡な目で佐伯に睨まれる。ああ、もう石にでも何でもしてほしい。

「次の次の駅だから210円よ」

沙織も緊張が抜けないのか少し声が上ずっているように聞こえる。私も買わなくちゃ、と明るく独り言を言いながら沙織が佐伯の隣の券売機に小銭を入れる。

「光太郎」

「何？」

「この人どなた？」

気だるそうに沙織を指した細い指の爪が透明に光っているのはマニキュアを塗っているのだろう。それが少しも大人ぶって見えないのが彼女のすごいところだ。

「栗山沙織さん。同じ学年で隣のクラスの」

切符を手にした沙織が、栗山です、と恭しく頭を下げる。

「光太郎が呼んだの？」

沙織のお辞儀を無視して佐伯が僕に不機嫌そうに問いかける。

「ごめんなさい。私が勝手に押しかけて来たの。話を聞いて楽しそうだなって思ってた」

仁科君は悪くないの、という感じでにこやかに友好的に沙織が僕の前に立つ。

陽平に誘われたのに恋敵の佐伯に対して陽平のマイナスになりそうなことを口にはしない。そこに沙織の度量の大きさと清らかな性格が垣間見える。

「楽しそう？画材買いに行くだけだよ」

「私もどんな画材があるのか見てみたいなって。いいでしょ？」

別にいいけど、と呆れ気味に許しが出て僕と沙織は一瞬視線を交わし互いに安堵の表情を見せ合う。

「じゃあ行こうよ。光太郎、何分の電車？」

「ちよつと待つて。陽平がまだ来てない」

腕時計を見ると待ち合わせの時間を三分過ぎている。

「いいじゃん。待ち合わせの時間はもう過ぎてるんだし来ない人が悪いんだから」

「それはそうだけど、せっかくなんだからもう少し待つてあげよう。ねえ、栗山さん」

「もうすぐそこまで来てると思うの。私、電話掛けてみるね」

沙織は肘にかけていた鞆から携帯電話を取り出し僕たちから少し離れていった。

耳に電話を押し当て、小首を捻り、ボタンを操作しては再び耳に当てる。同じ動作を繰り返していることからしてなかなか陽平がつかまらないようだ。

「昨日から理解できないんだけど、マツは何でついてくるの？美術部OBでもなければ絵が好きなわけでもないんでしょ？」

佐伯がいらついたような口調で僕を責める。マツとは松本陽平のことに違いない。

「言つてたじゃん。画材屋のそばにサッカーグッズの大きな店があるって、そこでスパイクを買うらしいよ」

僕だつて苛立つてくる。どうして僕が陽平のために佐伯の攻撃にさらされなくてはいけないのか。どうしてあいつは時間どおりに行動できないのか。

「だから、別にあたしたちと一緒に行く必要ないじゃん。スパイクでも何でも一人で買いに行けばいいでしょ？」

「そりゃそうだけど。俺、口下手だから俺と二人でいてもきつとつまらないよ。みんなで行った方が楽しそうじゃん」

「別に楽しくなくなつていいの。画材を買って帰るだけなんだから」
「そう言うなつて。部活はみんなでやるもんだよ。これもその練習だと思つてさ」

「光太郎はいつもそういうこと言うけどさ、前の学校じゃそんなこと言われたことないよ。部活動がどうか、チームワークがどうか」

「郷に入つては郷に従へつてことだよ。うちの美術部はチームワークも重視してる。そういう学校ごとの校風も取り入れるのが部活動なんだよ」

佐伯はむすつとした表情で押し黙った。

完全に口から出まかせなのだが部活の一環だと言えば彼女は大人しくなる。彼女なりに一応、僕のことを部のOBとして、あるいは美術に敬意を表している人間として尊重してくれているからなのだろう。しかし……。それも僕が幽霊部員だつたことがばれるまでだ。事実が知れたら僕はただでは済まないのではないか。何とか中学校を卒業するまでは佐伯の前ではアートを愛する人間の振りを続けなければならない。

「サオリン、つながつた？」

佐伯がなれなれしく呼びかけると沙織が俯き加減で戻ってくる。

「全然出てくれない」

しょんぼりを絵に描いたような肩の落とし方だ。背中に疫病神が憑いていないか目を凝らしてしまう。

遠くから踏切が鳴る音が聞こえてきた。電車が近づいてきている証拠だ。この電車を逃すと三十分近く待たなくてはならない。

「タイムオーバー」

佐伯は一人で改札を通っていく。もはやその背中を引きとめる言葉が出てこず僕と沙織は黙って見送るしかなかった。

ホームへ向かう彼女の背中を見つめる僕の心に一つのアイデアが浮かんでいた。

自動改札機が二台しかないこんな小さな駅で待ち合わせに失敗することはあり得ないし、いくら時間にルーズでも陽平は何の連絡もなしにすっぱかすような男ではない。とすれば沙織にここに残ってもらって僕が佐伯と二人で買い物に行くというのはどうだろうか。

今から佐伯と二人きりになるのは肝が冷える思いだが、やがて現れた陽平は沙織と行動を共にすることになる。僕たちを追いかけて電車に乗るもよし、諦めて別のデートするもよし。どちらにせよ陽平との仲を深めたい沙織にとって悪い状況ではないに違いない。

「栗山さん、あのさ」

「仁科君」

沙織も同じことを考えていたのか、僕が何も言わなくても彼女はこくりと頷いた。

そのとき僕と沙織の間にぬつと黒いものが割り込んできた。

「いい雰囲気のところぶち壊してごめんよ。行こうか」

陽平だった。僕と沙織の肩に手をまわしてまるでいなくな馬をなだめるようにぽんぽんと叩く。

「行こうか、じゃねえよ。電車が来ちゃうだろ」

「だから行こうって言ってるんだろ。さ、早く、早く」

これ、と沙織が陽平に切符を差し出す。彼女はあらかじめ二枚買っていたのだ。クー。何と甲斐甲斐しいことだろう。目頭が熱くな

るのを禁じ得ない。

しかし陽平は当たり前のような顔で「サンキュ」と受け取り、さつさと改札を抜けていった。

「陽平！」

僕が怒鳴るように声を出すと沙織が僕のＴシャツの裾を軽くひっぱり、眉を八の字にして小さく横に首を振った。その「これも惚れた弱みなのよ」というような諦めに似た表情に僕は何も言えなくなる。

余裕を持って予定時刻より前に来て待つ僕と沙織。精密機械のように時間きっかりに現れた佐伯。遅ればせに駆けつけるも電車にはギリギリ間に合わせる陽平。

とにかく無事出発できそうで一息つくと待ち合わせにもそれぞれの性格が出ていて面白いような気にもなる。

「じゃあ、行こうか」

「仁科君、お先にどうぞ」

「いや、ここはレディファーストで栗山さんがお先に」

僕と沙織が改札の順序を譲り合っているとホームで陽平の大きな声がこだまする。

「ちんたらしていると置いてくぞ。何やってんだよ」

ちやっかり佐伯の隣に身を寄せるように立ってこちらに手を振っている陽平を見て僕と沙織は盛大にため息をついた。

到着を知らせる警笛が鳴り響きホームに電車が滑り込んできて僕と沙織は慌てて駆けだした。

見慣れた車が正面からやってきて僕たちの背後に通り過ぎていく。ほんの一瞬の出来事に僕の心は千々に乱れた。

何故？どうして？

「どうしたの、仁科君」

僕の異変に気付いたのは沙織だった。

僕は必死に表情を取り繕い口角を上げた。

「何でもないよ。さ、早く行こう」

西の空を指さして前進を促す。そこには大きなビルの外壁に設置されている観覧車がゆったりと回転していた。この様々なシヨップがテナントとして入っているビルは去年建てられたときからシンポルの観覧車で大きな話題を呼んだが、ここにいる四人の誰もまだ乗ったことがなかった。

一通り買い物を終えたとき「記念にあれに乗ろうよ」と高らかに提案したのはもちろん陽平だった。

僕は佐伯の様子を窺った。おそらく彼女は「子供じみたこと」と小蠅を追いつかうような仕草で却下するだろう。そんな僕の予想を見事に裏切つて彼女があっさり「いいよ」と同意したことで僕たちは彼岸の時期に一向に弱まらない日差しの下をてくてく歩いてきたのだ。

「栗山さんは観覧車好きなの？」

精一杯テンション高く沙織に話しかける。

「そうねー」

実は高所恐怖症なのよ。でも、ここは退けないでしょ。

沙織が僕に耳打ちするように小声で答えてから決意の眼差しで目前に迫った鉄の塊を見上げる。そしてその視線をライバルに向けた。

「佐伯さんはどう？」

「あたし、馬鹿だからね。煙と一緒に」

佐伯が余裕の笑みを浮かべるのを見て沙織はさらに表情を強張らせた。

マジかよー。

先頭を歩く陽平がうんざりした声を出す。

「一時間待ちだつてよ」

振り返った陽平は恨めしそうにギラギラ照りつける太陽を見上げた。

前方を見遣ると乗り場のある二階から延々と人の列が続いていて僕たちの目前に「ここから1時間待ち」というプラカードを持った店員が立っていた。

とりあえずそのまま列の最後尾に並んでみたものの日除けのない歩道の上でこれから一時間立ち続けるといふ状況に僕たちは悲壮感漂う顔を突き合わせる。

「どうする？」

言い出しつぺのくせに陽平が手の甲で額の汗を拭きながら弱々しい声を出す。

しかし、列に並ぶ人たちの一様にうんざりした顔を見るとここは確かに思案のしどころだ。

軽いノリだったのに荒行、苦行のようになっては誰かさんの機嫌を損ないかねない。そんなことになってはせっかく四方に注意を配って慎重に築き上げてきた今日という時間が台無しになってしまう。それはきつと陽平や沙織も同じ気持ちだろう。

「いいじゃん、一時間ぐらい」

軽い調子で計画続行を訴えたのはまたもや意外にも佐伯だった。

一人涼しい顔で遠いところから眺めるように僕たち3人の顔を見渡す。

「そつだよな。ここまで来たら乗らずに帰る方が後悔する。よし、絶対に乗るぞ！」

陽平は簡単に佐伯に靡いた。それを見た沙織も作つたような笑顔を浮かべて頷き日差しを遮るように額に手をかざした。

佐伯は歩道わきに設置してある自動販売機でペットボトルのウーロン茶を購入し飲みながら戻ってきた。彼女もこの暑さがつらくないはずがない。彼女の首筋にも汗が浮かんでいたが列の前方を見据えるその目には暑さになんか負けず絶対に観覧車に乗るんだという意気込みが感じられるようだ。

こいつ実は内心ものすごく観覧車を楽しみにしているな。平静を装っている心の奥を見つめるように僕は佐伯の横顔に注視した。

しかし、僕の視線に気づいた佐伯に見つめ返され僕は慌てて目を陽光が照り返す歩道に落とす。

黙って一点を見つめていると先ほどの映像が僕の頭の中でフラッシュバックする。

先ほどの車は父が運転していた。そして助手席には運転席に向かって熱心に話しかける坂本先生。

それだけのことと言えはそれだけのことだ。

父が勤務する博物館はこの駅のそばにある。

坂本先生の専攻は日本史で以前から父の博物館での仕事や発掘の進捗状況に興味があるようだった。

土曜日の今日、父は久しぶりの休日出勤ということで平日と同じ時間に起きて出掛けて行った。前もって予定していたのか偶然なのか博物館を訪れた坂本先生と父がこの暑さに耐えかね喫茶店で喉を潤すために車で向かって僕らとすれ違っただけ。大方そんなところなのだろう。何もおかしいところはない。

それなのに僕の心はささくれだっている。それは何故か。

「仁科君。大丈夫？少し顔色悪いよ」

沙織は周囲に気を配れる素晴らしい女性だ。摘み取ったはずなのに根が残っていたのか彼女に対する恋情の芽が僕の心の表面から顔を出す。

「ありがとう。大丈夫だよ」

「脱水症状かもよ」そう言って佐伯は手にしていたペットボトルを僕に向かって差し出した。「ほれ。水分摂った方がいい」

こいつ意外に良い奴なのかもしれない。

僕は反射的に佐伯の優しさに手を伸ばそうとした。しかし、すぐ脇から殺気のような気配を感じて瞬時に僕の体は凍りついた。

折角の申し出なのだが陽平の目の前で佐伯が口づけたペットボトルを受け取り渴きを潤すことは大いにはばかられる。もしそんなことをしたら冗談ではなく観覧車の上から陽平に叩き落とされる可能性が出てくる。

「ありがとう。でも俺も買ってくるからいいよ」

そう言うのと漸く陽平の目から人を縛りつけるような力強さが失せた。

僕は急に金縛りから解き放たれたように四肢に動きを取り戻して喘ぎながら自動販売機に向かった。

硬貨を入れ迷うことなくコーラのボタンを押す。

ゴトン。

商品が取り出し口に落ちてきた音と同時に僕の頭にも先ほどの自分への問いかけに対する答えが降りてきた。

生臭かったのだ。父の横顔を見つめて話しかける坂本先生とその言葉にゆったりと笑う父。車の中で談笑する二人の様子が僕の目には保護者と担任教師という関係以上に親密に見えたのだ。

ペットボトルを手にして振り返るとそこには陽平を眩しそうに見上げる沙織がいて、何やら熱心に佐伯に話しかける陽平がいて、面倒臭そうに口を開く佐伯がいる。複雑な三角関係に嵌りこんでいる三人の男女だ。

しかし、彼らよりも父と坂本先生の間から漂う空気ははるかに濃密でねっとりしていた。それを思いがけず吸い込んだ僕は毒氣にあたり呼吸困難に陥ってしまったのだ。

胸が痞える。肺が上手に酸素を取り込めない。苦しくて立ってられない。

やはりこれ以上とてもみんなの前で笑ってられない。それに僕のせいでこれからの雰囲気壊すのは嫌だった。

「ごめん。悪いんだけど先に帰るわ。俺のことは気にしないでみんなで遊んでて」

「急にどうしたの？やっぱり体調悪いの？」

沙織が不安げに訊ねてくる。その表情は僕の調子を心配するのと同時に、この場から僕という味方を失うことを危惧しているようだった。

僕は力なく首を横に振って否定する。

「ちよつと用事があるんだ。本当にごめん」

協力すると言ったのにこんなことになって沙織には本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだ。僕は買ったまま蓋も開けていないコーラを強く握りしめた。

「用事があるんじゃ仕方ないな」

陽平がスパイクが入った買い物袋を肩に担ぎながら訳知り顔で僕に視線を絡ませてくる。ここは任せておけ、と目が言っている。

僕はその視線を避けるように力なく項垂れた。

陽平は僕が母さんの見舞いに行くと思っっているようだ。それはあながち間違いではないが、時間はまだ大分早い。

しかし、彼の憐れむような表情に母さんを強く意識させられて僕の心はさらにずぶずぶと沈み込んだ。

さっきの父と坂本先生を見たら母さんはどう思うだろうか。

嫌でも浮気の二文字が僕の頭を過ぎる。いくら楽天家の母さんでも自分が不自由な体で入院している間に夫が息子の担任教師と深い仲になっているかもしれないと思ったら笑い飛ばすことなんてできないだろう。

母さんが可哀そうだ。僕はやり場のない怒りを込めて拳を握り締めた。

「急に用事って何だよ？」

僕はその一言に背筋を凍らせた。

せつかく高揚していた気分には水を差されたのが気に入らなかったのか佐伯が不機嫌そうに眉根を寄せている。

「用事は用事だから仕方ないじゃん。観覧車は三人で乗っても楽しいぞ。どういう風に座る？今のうちに決めようぜ」

黙りこくった僕を気遣うように陽平が場の雰囲気を取り繕おうとする。

「私、高いところ怖いし一人は嫌だな。陽平君の隣がいい」

おどけた感じで沙織が手を挙げるが、目は笑っていない。ここが勝負所と踏んだのだろう。いいかな、と陽平にではなく佐伯に問いかけるあたりが策士だ。佐伯が沙織と争って陽平の隣に固執するはずがない。佐伯が了解してしまえば陽平に巻き返す場面は回ってこないだろう。

「マツ、光太郎の用事が何か知ってるな」

佐伯は沙織を無視して強引に話を戻した。佐伯の剣幕に陽平がたじろぐ。

「それは、その……」

「病院に行くんだ。母親が入院してるから」

僕は三人の前に放り投げるようにそう告げるとすぐに踵を返した。語尾が震えたことを気付かれただろうか。背を向ける前にすでに目が潤んでいたことを悟られただろうか。

僕は逃げるように早足でその場を離れ容赦なく降り注ぐ日差しの下を駅に向かって歩いた。

どうして僕が嘘をつかなくてはいけないのか。母さんのことを出してまでして皆をだますなんて。

悔しさと腹立たしさが募って叫び声をあげたくなる。胸に迫ってくるものをぐっと押し殺していると思えば高温多湿でふやけた頭がさらにおかしくなりそうだ。

気がつけば止めどなく涙が頬に伝い落ちたていた。しかし僕の背中を三人が目で追っていると思うと拭うことさえもできなかった。

僕はペットボトルの蓋を捻り冷たいコーラを無理やり喉に流し込んだ。慣れ親しんだ甘さの中に今は微かに苦みを感じられた。

母さんはベッドで静かに寝息を立てていた。疑いや偽り、裏切りといった人の醜さなど知らないような悲しいぐらい穏やかな寝顔だ。眠っている時、人は誰もがこんなに柔らかで無垢な表情をしているのだろうか。

両親はいつも僕が目覚ます前に起きていて、僕が寝入る頃もりびんぐにいた。だから一人っ子の僕はこれまで家の中で誰かが寝ているのを見ることはなかった。ペット禁止のマンション住まいなので犬が寝そべっている姿すら目にするのがない。

丁度二年ほど前に母さんが交通事故にあって入院することになったから僕は毎日のように母さんの寝顔を見るようになった。

眠っている母さんはいつも口角が少し上がっているような優しくてあどけない面ざしをしている。その顔を病室で見下ろすたびに僕は少し寂しいような切ないような気持ちになる。

母親を看病するなんてもっともつと先のことだと思っていた。僕自身が年を取り、その分母さんも老齢になって入れ歯を使い腰が曲がり膝が痛くなって、そうなって初めて「母さんももう年だから仕方がないよ」と諦めとも言える笑いを浮かべ昔の思い出を語り合う。そんな介護の場面は臆に想像することができたが、小学校を卒業して間もなく病院通いが始まるとは思ってもみなかった。

青白くかさついた感じはあるがまだ十分に若々しい肌をした母さんが病室のベッドで横になっているのを中学生の僕が眺める。それは間違いなく目の前にあるのに今でも現実として受け入れがたい、否定したくなるような景色だった。僕にとっての母さんは家で僕の帰りを待っていてくれる温かくて柔らかい存在であるはずだったのに。

一時間ほど経っただろうか。母さんはゆっくりと目を覚ます。僕を見つけると軽く目尻を下げて、ありがと、と口を動かす。

「光太郎、何かあった？」

内心ドキリとするが表情は変えない。

「どうして？」

「泣いたんじゃない？目が赤い」

女という生き物はどうしても洞察力に長けているのだろうか。母さんにしても、沙織にしても、佐伯にしても。ときにその鋭い観察眼で僕を全身麻酔がかかるほど驚かせる。

「ちよつとゴミが入ったんだよ。外は風が強くてさ」

「そう。ならいいけど」

母さんはじつと僕に注いでいた視線をゆっくり動かし窓を見やる。ベッドから見えるのは光をキラキラと反射させる青々とした葉っぱだけだ。

「少し散歩でもしようか？」

母さんと二人で歩くのは気恥しいのだが、狭い病室に二人きりでいるのは今日に関しては気づまりだった。

「外は風が強いんじゃないの？」

母さんは窓の外を眺めている。木々は大して揺れていない。

僕はぐつと返事に窮したが頭を巡らせた。

「風は南からだから中庭なら大丈夫だよ」

母さんは上体を起こしちよつとうんざりした顔を僕に向け首を横に振った。

「暑そう。日焼けしたくないし」

「たまには外に出た方が身体にいいんじゃないの？」

「じゃあ、日焼け止め買ってきて。あと、帽子もね。つばの広くて可愛いやつ」

「わがままだな」

「そう言えばこないだ買ってきてくれた雑誌にいいのがあったんだ。あんなのがいいな」

どこに載ってたかな、と母さんは雑誌を取り出しぺらぺらとページをめくる。

「何で俺がそんなの買ってこないといけないんだよ」

僕は慌てて思いつきで言ってしまったことを後悔していた。

ファッション誌で取り上げているようなものがどこで売っているのか僕は全く見当もつかない。しかも女性モノを買うなんて恥ずかしくてできるはずがない。

麦わら帽子でね、花柄リボンがついてるんだけど。母さんはもう僕の言葉に耳を貸そうとせず、ぶつぶつ独り言を言いながら雑誌の写真に没頭している。

僕は母さんを止めることを諦めてパイプ椅子から立ち上がり冷蔵庫庫から麦茶を取り出した。コップに注ぎ一気に飲み干す。

「光太郎」

「何？」

僕は喉が渴いていたらしい。空になったコップに再度麦茶を注ぐ。

「私のことが重荷になつてたらごめんね」

母さんの言葉にびっくりして振り返る。

「何言つてんだよ。重荷だなんて・・・」

「あ！これこれ。こんなのが欲しいの。かつわいいな」

母さんは僕に喋る隙を与えない。笑っているのか泣きそうなのか分からないような無理やり歪めた感じの表情で僕に雑誌のページを何度も指さした。

母さんを悲しませるような自分ではいけない。それだけは絶対に許されない。僕は自分の少し張りを失っていた心に活を入れた。

月曜日、僕は登校してくる陽平を教室前の廊下で待ち伏せした。観覧車の前で突然帰ってしまったことを詫びたかったからだ。

彼は怒るところか珍しく神妙な顔で僕に向き合った。

「いや、こっちこそ悪かったなって考えてたんだ。俺も母親がずっと入院してたらデート気分で観覧車乗って騒ぐなんて気にはちよつとなれないと思う」

陽平は勘違いをしたままだったので曖昧に小さく頷くことで僕はそれに合わせた。

しかし頭の中にはまたあの映像が蘇ってきて土日之間に考えていたことが堂々巡りを始める。

談笑する父と坂本先生。

二人の関係はどういうものなのだろうか。そのことが気になって僕は土曜日からうまく眠れていない。

仮に二人が今も僕を介した上での関係でしかなく一生徒の父親と担任教師の間柄から深化していかないのであつたとしても、僕はあの風景をさらりと、まるであのとき二人が乗った車が僕の脇をするりと過ぎていったように、一つの何でもない日常として記憶の片隅に消化することは絶対にできないと思う。それはやはり父が母さんのことを疎かにしているような印象につながるからだ。

母さんが入院しているときに何やってるんだ、と無性に頭にくる。坂本先生だつてうちの家庭状況が大変だつてことを知っていながらあんな風は無邪気に父との会話を楽しむなんて分別が足りないように思えて僕は本当に良い気がしない。

だが、二人が何でもない関係であるという想定の下では父や坂本先生に対する感情は僕が飲み込みさえすればそれで済む話だつた。それは転んだ時の膝にできた擦り傷のようなもので、一時は苦痛を伴うがやがてかさぶたとなりいつの間にかどこにあったのか分から

なくなるぐらいに時間の経過とともに消えていってしまう。

問題は、やはりおぞましいことだが二人が不倫という仲に陥っている場合だ。あるいは、これからそうなるうとしている過程の段階であるケース。

胸糞悪い最悪の場合だ。

こんなことをいくら考えたって想像の域を出ないのだから考えるだけ無駄で精神衛生上良くないとは分かっている。しかし、あの二人を見てしまった以上僕はこのことに目を瞑ることができないでいる。考え過ぎなのかもしれないがあのときの父と坂本先生が作り出していた空気に夏の汗臭い肌が絡み合ったあのような熟んで汚れたにおいを嗅ぎ取った気がしてならない。

もし二人がそういう関係になっていたとして、僕は彼らを非難する前に、正当化までではできないにしろ何かしらその罪を軽くするような情状酌量の余地はないかと考えていた。

不倫は世間一般的にも法に照らしても良いことのはずがない。目を血走らせ肩を怒らせて不行跡をあげつらう非難の言葉はいくらでも出てきそうだが、父が根っからの悪い人間ではないことを僕は知っている。だから、肥溜めに手を突っ込むようなことでもそこに父がいるのなら何とか救いの手を差し伸べたいような気がしている。

陽平に相談したら「父と担任教師である前に男と女なんだから理由なんかない」などと鼻で笑われてしまいそうだ。だけど、僕はあの父が不倫の道を進んでいるのならその選択肢をとってしまったよんどころのない事情がその胸に大きく横たわっているように思うのだ。

一つは、仕事の行き詰まり。

喜び勇んで取り組んだ発掘の仕事が一年かけても成果らしい成果を見せないまま規模が縮小されているという現実が聞かされなくて想像に難くない。リーダーの大役を任せられ自負と期待を胸に秘めて臨んだ現場から何も出てこなかった失望感はいかほどか。僕には知りようもないが晴らしようのない鬱憤が父の胸には充満している

のだろう。

もう一つは母さんのこと。

父にとつての妻の状況が事故以来全く好転していない。入院が長期化していて母さんが家にいない日々はいつ終わると知れない。そんな生活を送り続ける中で息子である僕は少しずつその閉そく感に息苦しくなり、全身に疲労を感じてきている。僕がそうであるのなら、夫である父の苦しみとなると幾ばかりだろうか。

母さんのことでは僕も目を背けていることがある。

それは母さんがこのまま本復することがないかもしれないということだ。怖いこと、本当に恐ろしいことだが、この二年間の現実を客観的に見れば僕だってやっぱりその可能性は低くないということぐらい分かる。正直言えば完治を期待していながらも、頭のどこかでは今の状況が続くうちはまだ良いのではないかと理解していた。そして今の状況が永遠ではないことも。

僕はただ、そういう考えに行きつく自分に無理やりストップをかけてそこから先の思考をやむやにしているだけなのだ。毎日毎日わざと思考の一部分を麻痺させている。この二年間の看病生活を送るなかで都合の悪い想定を直視しないで時間を過ぎさせる術を身につけていた。

発掘の仕事で忙しく立ち回っている間は父も妻の状況を忘れることができていたのかもしれない。忙しさに気を紛らわせていたのが、急に考える時間を与えられ不意に現実には立ち戻ってしまった。物事の先を追ってひとりで走っていく思考にストップをかけるのが間に合わなかった。そのとき父は妻の遠くない死を強く予感したのではないか。

未来を想像するとき、現実にかっかりしなくてすむようにあらかじめ悪いケースを想定し自分に言い聞かせておくことがよくある。太古の昔から人類は本能としてその能力を備えていたから未だに繁栄の途にあるのかもしれない。

その本能に従って妻に先立たれることを想定したとき、自分を守

るためにはどうするか。誰だって失望の程度は最小にしたい。だとすれば妻を想う気持ちを今のうちに小さくしておこうとするのは当然の帰着点だ。その結果父の心には余った部分ができてしまうだろう。悟りでも開かない限り心を空白になんかしておくことはできない。その余分の心は妻以外のどこかに向いてしまうことになる。そこに誰かが現れればどうなるか。

仕事と家庭に行き詰まりを覚えたがゆえに不倫に走ったのだとしてもやはり父を僕は罵倒する権利はあるだろう。しかし、ただそれだけのことで良いのだろうか。罵りあっても何の解決にもならない。現実はそのような短絡的なものでは済まないし、実の子である僕には他に担うべき役目があるように思えた。

「光太郎はよく頑張ってると思うよ、俺は。今の頑張りはきつと将来お前にとつて深い意味を持つてくるだろうな」

何も知らない陽平にそう言われても逆にっらいだけだ。

僕は黙って首を横に振った。

僕は何も頑張れていない。母さんに対しては父に対しても自分自身に対しても。毎日、毎日を無意味にだらだらと過ごしている。

その時、壁にもたれて話している僕と陽平の前を佐伯が通り過ぎていった。気づいているのかいないのか僕らには顔を向けることさえしなかった。

「佐伯に訊かれたんだよ。光太郎のお母さんはいつから入院してるのかって」陽平は佐伯の背中が教室のドアの向こうに消えてからこちらに顔を向けた。「だから二年前に交通事故にあつて、それからずっと身体の調子が良くないんだって言っちゃったんだけど・・・まずかったか？」

「いや、いいよ」

本来なら病院にいる母親のところへ行くと言った僕自身がその説明までして帰るべきだったのだろう。あんな別れ方をしたら誰だつて気になって当然だ。

「結局、佐伯は観覧車に乗らなかつたんだ」

「え？」

僕の心は不意に大きく揺さぶられた。

「次に俺たちが乗る番ってところまできて突然、あたし帰る、ってすたこらさっさ。引きとめようとしたんだけど、係員に、早く乗って、って急かされて仕方なく沙織と二人きりで乗るはめになっちゃってさ。あいつ、向かい合って座れば良いのにカップルみたいに横に並んで、高いところ怖いのに、とかなんとか言ってくっついてきて観覧車が終わったら無理やりカラオケボックスに引きずり込まれて延々と恋愛ソングを聞かされてさ。俺の目を見て、好きだの愛してるだの歌ってきて、どうしたもんかとほんと困ったよ」

他の男子が聞いたら滂沱たる涙を流して羨むような沙織とのシチュエーションだ。疎ましげに語る陽平に僕は呆れつつももう一度謝った。

教室に戻ると佐伯は自分の席で窓の外を眺めていた。

佐伯が観覧車に乗らなかったことは驚きだった。

彼女が垣間見せていたあのメルヘンチックな乗り物に対する並々ならぬ意欲を僕の言動が減退させてしまったのなら本当に申し訳なく思う。団体行動を乱さないことが部活動では大事なのだ、と偉そうに説いていた僕が独りよがりの行動をしてしまったことも詫びなくてはいけないところだ。しかし、教室で見る佐伯の横顔からは何人も話しかけてくるなというオーラがビンビン伝わってきてどうにも彼女に声をかけることができない。

とりあえず昼休みに先に沙織に謝りに行った。

沙織に話しかけると、周囲の男子からの殺気の籠った視線が痛い痛くないのって。

「お母さんのことで大変な仁科君にはこんなこと言って本当に申し訳ないんだけど……。あの後、すごく楽しかったの。充実したって言うか弾けたって言うか。文字どおり猛アタックできたの。だから図らずもだるうけど、あんな場面を提供してもらえて仁科君にはすっごく感謝してる」

本当にありがとう。感極まった様子で沙織が僕の手を取って頭を下げると僕はもう火あぶりにされているようないたたまれなさを感じて、ほうほうの体で逃げるように沙織のクラスを後にした。

放課後になって漸く僕は佐伯のもとへ向かうことにした。

彼女はきつと今日も美術室にこもり買ったばかりの絵の具でキャンパスに新しい色彩を施していることだろう。そこへずかずかと乗り込み作業の邪魔をするのは非常に勇気のいることだったが、今日を逃してはもう二度と謝るタイミングは来ないような気がしていた。3階は教室のドアも廊下の窓も全て開け放たれている。近づいていくと部屋の中から夏の余韻が残った少し生ぬるい風に運ばれて絵の具のにおいが漂ってきた。長年にわたって美術室の床や壁や天井に浸みこんだ決して強くはないが濃く深いにおい。懐かしいような、それでいて肩身の狭い寂しい感情が胸に訪れる。

僕は確かに美術部に籍を置いていたが、部活動のためにここに来たのは本当に数えるほどしかない。当然上達するはずもなくろくに作品を仕上げることもなくそれでも少し生真面目な性格で時折義務感に突き動かされて顔を出したこの教室。

こそそそと廊下から中を覗き見る。美術室には二人の生徒がいるだけだったことに僕は少しほっとする。

そのうちの一人、奥の窓際で黒板に向かって座っているのが佐伯だった。いつにも増して険しい表情。この暑さのなか、他を寄せ付けない圧倒的な雰囲気醸し出してキャンバスに正対して鎮座している。

もう一人、廊下側で行き詰った感じで少し小首を傾げキャンバスを眺めている女子生徒の顔に僕は覚えがなかった。あの鬼気迫る形相の佐伯と同じ空間でよくも平然と作業ができるな、と半ば呆れてしまうが、それはそれで感嘆に値する胆力だとも思った。

僕は小さく、「失礼します」と口の中で言っただけ足を踏み入れた。

廊下側の女子生徒が軽く僕に会釈する。僕のことを知っているのだろうか。彼女の目に少し親しみがこもっているように見えた。放

課後に美術室に来る人間は美術部に関係しているだろうと思ってお辞儀をしてくれたのかもしれない。

僕も軽く頭を下げて彼女の前を通り過ぎる。

「ちよつといいかな」

キャンバスを挟んで向かい合う位置に立つても顔色一つ変えずに筆を走らせている佐伯に僕はおずおずと声を掛けた。

目の前に立つていて聞こえていないはずがないし、視界に入っていないはずがない。しかし、佐伯から返事はない。

佐伯は本当にキャンバスの四角い枠以外に視野が及んでいないような様子で作業を続けている。

詫びを入れに来たのに邪魔はできない。僕はその場で立ち続けているしかなかった。暑くてじつとしているだけで額に汗がにじんでくる。

手持無沙汰で窓の外に目を向ける。

土埃の舞うグラウンドで野球部員が監督のノックを代わる代わる受け、走り高跳びの練習をする陸上部がいて、サッカー部員がいろんな角度からシュート練習を行っている。目を凝らすと陽平もそこで一緒に汗を流していた。

陽平の動きは他の生徒と比べると歴然とした違いがあった。パスを受けるときのトラップの安定感。縦にドリブルすると見せかけての鋭い切り返し。速い振り抜きからの強烈なシュート。

ここまででは聞こえてこないがゴール裏で見ている女子生徒たちが歓声を上げているのが分かる。あの男前があんな動きを見せたら、そりゃうつとりしちゃうよな。

「何？」

「へ？」

気がつく佐伯が怪訝な顔つきで僕を見上げていた。

「あたしに用があるんでしょ？」

射るような眼差しですどんと訊かれると心構えがあってもまごついてしまう。

「そうなんだ。あの、その、土曜日はごめん。急に、その・・・」
何て話せば良いんだろう。母さんの顔が見たくなって何も言わずに帰っちゃった、などとは言えないし。

「そんなことよりさ」佐伯は絵の具を仕舞いだした。今日の活動はもう終わりなのだろうか。「K高校って難しいの？」

「受験のこと？そうだなあ。うちの学校からだと上位三十ぐらいまでかな」

「三十！」

佐伯は一瞬目を見開くと、途方に暮れたように腕を組み口をへの字に曲げた。

「K高に行きたいの？」

「K高には楠木って先生がいるんだろ？」

「そうなの？知らないな」

そう言つと佐伯は僕を蔑むような目で眺めた。

「光太郎、美術部のくせにK高のクスクス知らないのかよ」

「知らないよ。そんなに有名なの？その先生」

知らないものは知らない。しかし、僕は何となく自分の返答が失敗だったような嫌な予感を覚えた。

佐伯は椅子の背もたれに身を預けて顔を廊下側に向けた。

「部長、この人こんなこと言ってるよ」

佐伯に声を掛けられた廊下側の女子生徒が困ったような顔で僕の方を見た。

部長？彼女が僕に責任を追及してきた西堀だったのか。

「仁科先輩、K高の楠木先生はこのあたりの学校の美術部員のあこがれの存在ですよ。私の学年の部員は楠木先生の指導を受けたくてみんなK高を目指してます」

「光太郎。それでも少しは美術を志してるのか？」

試すような口ぶりの佐伯に僕は足もとから怖気が這いあがってくるのを覚える。

「ま、まあね」

とうとう化けの皮がはがれようとしている。僕は佐伯の手によって拷問にかけられ、この絵の具の飛び散った美術室の床は僕の血でさらに一つ染みを増やすことになるのか。

「ま、いいけど」佐伯は組んでいた腕をほどき頭の後ろで指を交差させた。「光太郎ってこないだの実力テスト、学年で何位だった？」

突然、佐伯が僕のプライベートに顔を突っ込んでくる。テストの順位は受験生にとって神経質になる分野だ。

「何でそんなこと言わなきゃ・・・」

「何位だった？」

佐伯の眼は威圧的だった。聞きだすまで引き下がらないという意思表示が顔に現われている。彼女の傲慢な態度の前には僕の抵抗など空しい。

「・・・9位だけだ」

「9！」佐伯は目を見開いて再び西堀の方に顔を向けた。「部長、9位だって」

「すごいですね。羨ましいな」

「光太郎はK高受けるの？」

「まあ、そのつもりだけど」

佐伯は明らかに僕を見る目の色を変えた。

「さつきも部長と話してたんだけどさ、あたしたち勉強が苦手で、非常にまずいことにあたし90位。部長はあたしより少し良くて70位」

「ちよつと、佐伯先輩。内緒って言ったじゃないですか」

「まあまあ」

二人は打ち解けた様子だった。

佐伯が部活に対する姿勢を改め、美術部員も彼女のことを認めたということだろう。そのことに自分が一役買えたということなら少し誇らしい気持ちになる。

「光太郎」

「何？」

佐伯の僕を見る目にいつの間にか蔑みが消え、信じられないことだが少し媚びているような印象がある。佐伯がこんな視線を送ってくるとは思ってもみなかった。何か噓くさい。

「勉強教えてくれない？」

「それはいいけど」

「ほんと？よし、じゃあ早速」

「え？今から？」

「そ。今から」

「俺、あと一時間ぐらいしたら用事があるんだけど」
もちろん今日も病院に行くつもりだ。

「じゃああと一時間」

佐伯は僕の用事が何かを訊くことなく、テキパキと後始末を終わらせた。

「部長。悪いんだけどこの絵、乾いたら準備室にしまつてくれる？」

そう言っただけでイーゼルごと美術室の隅に動かした絵には女性が描かれていた。三面鏡の前に座り口紅を引く女性の後ろ姿。彼女は背後に立った誰かに気づいたようで鏡越しに目で微笑んで見せている。これは佐伯の母親だろうか。何気ない生活の一風景に現れた母親の愛する我が子への深い慈愛の情が表現されているように僕は受け取った。

「行く」

佐伯が僕の袖を引っ張るように掴む。

「どこへ？」

「図書室。別にあたしんちでもいいけど、どっちがいい？」

何かを試すように僕の顔を覗き見る佐伯にどきまぎしてしまう。
僕は慌てて答えた。

「図書室で」

廊下に出た僕らの背中に西堀が、「ごゆっくり」と声を掛けたので僕は振り返って思いきり睨みつけた。

しかし、西堀は小さく舌を出しただけだった。

僕と佐伯はそれから毎日放課後に図書室で教科書や参考書を開きシャーペンを走らせた。

基本的には個別に自分の勉強を進め、分らないところがあれば佐伯が僕に訊くという感じだった。前の日の夜に取り組んで間違えた問題の解き方を質問されることが多く、訊かれれば僕はできるだけ丁寧に佐伯に教えた。

佐伯は毎晩欠かさず問題集を解いてきた。しかも結構な量を。質問の数と内容からしておそらく僕以上に勉強に時間をかけている。そして僕への質問は常に前傾姿勢だ。

佐伯が真剣にK高校を目指していることが意外にも僕には刺激となつて集中力を向上させた。

人に教えることは思っていたよりも難しく自分のためにもなった。佐伯に教えているようで自分の基礎を固めることにつながる場面が多々あつて、はじめは乗り気でなかった僕も次第に二人で勉強することの意義深さを思い知った。

図書室は静かだった。収められている本は古いものばかりで、かつ狭いので図書室を利用する生徒は少なく、しかし何故か空調は良くいいて勉強するには好条件の穴場でもあつた。

佐伯はぱったり美術室に行かなくなった。

あの三面鏡に映る女性は誰だったのだろうか。それを僕はまだ佐伯に訊いていない。

「やばっ。光太郎。もう五時だよ!」

向かいに座った佐伯の抑えてはいるが鋭い声が図書室に響く。

「ああ。ありがと」僕は顔を上げて壁の時計を確認する。「ほんとだ。じゃあ、この辺で」

僕らは机の上を急いで仕舞い始めた。

佐伯は僕が毎日母さんの見舞いに行くことを知っていて、時間に

なると気をつけて教えてくれることがある。しかし、今日は二人とも勉強に集中していたせいか時計に気づくのが遅れたようだ。今頃母さんは僕のいない病室で一人寂しく目を覚ましているに違いない。僕らは競うように図書室から出た。

ツクツクボウシが鳴いている。長かった夏も終わりだ。明日からは中間テストが始まる。

「ねえ」

「何？」

「そのうちあたしもお見舞いに行つていいかな」

その提案に僕は一瞬返事が出来なかった。もちろん佐伯が病院に来ること自体は何も問題はない。しかし僕が女の子を連れてきたとなったら母さんのはしゃぎようが目に浮かんでどうにも面倒に思えたのだ。

「やつぱちよつと非常識だよね。忘れて」

僕の顔色を読んだのか佐伯が少し申し訳なさそうに頭を？く。

「いや、全然そんなことないよ。喜ぶと思うし」僕は母さんに頼まれていたことを思い出した。「そうだ、佐伯にお願いがあるんだけど」

「何？」

「お見舞いにくるときに麦わら帽子を買つてきてほしいんだ。もちろんお金は俺が出すからさ」

「お金のことはいいけど、何で麦わら帽子？もう季節じゃないよ」

「ちよつと前に散歩を勧めたときに母さんに日焼け対策用に頼まれてたんだ。日焼け止めぐらいならコンビ二に売ってるからいいんだけど、麦わら帽子はどこで買えるのか分からなくて」

雑誌に載っているようなもので、つばが広くて花柄のリボンがついていて、と説明していると佐伯がクスツと笑った。

「お母さん、可愛い人だね」佐伯は自分の胸を叩くような仕種を見せる。「お任せあれ。きつと気に入ってもらえるの見つけてくるよ」
「ありがと。これで母さんももう少し積極的に身体を動かしてくれ

るようになると思うよ」

「うん。それじゃ、ここで。あたしはちよつと美術室に寄るから」
僕と佐伯は美術室と校舎をつなぐ渡り廊下で互いに手を振り合つた。

僕は佐伯の背中を見送りながら顔の横で振っていた手をゆっくり握りしめた。彼女の姿が階段の上に消えたのを確認して僕は少し駆け足気味に自転車置き場に向かった。

彼女とこんなに屈託なく話せるようになるとは思ってもみなかった。

佐伯はクラスの中では相変わらず仏頂面で通しており、僕と二人でいるときの口数の多さや柔らかい表情を普段見せることは全くない。

こここのところ図書室通いをしているうちに気づいたことは彼女は意外に人見知りで恥ずかしがり屋だということだ。その性格が彼女の日常の鉄仮面のような感情を出さない顔や他を寄せ付けない雰囲気を作り出している面は大いにあるのではないだろうか。

図書室で気分転換に手に取った本を借りるとき、図書委員に申し出て所定の用紙に必要事項を記入するだけなのに、顔を少し赤らめて僕に頼んだりする。一度、西堀が美術部員と一緒に図書室に来たときに挨拶されると西堀ともろくすっぱ言葉を交わすことをせず、彼女たちが出ていくと大きく息を吐き出したり、うつむきがちにハンカチで額や首筋の汗を押さえたりするのだ。

あんな風に素の表情（僕が思っているだけだが）を僕の前で見せてくれるのはもしかして……。

自転車置き場にたどり着き、鞆を前かごに入れたときに僕は小さな悲鳴のようなものを聞いた気がした。聞いたというよりそれは直接僕の心に訴えかけてきたような感覚だった。しかも声の主は佐伯だったような。

錯覚だろうか。少し佐伯のことについて考え過ぎなのかもしれない。

僕は校舎を振り返り美術室のあたりを仰ぎ見た。

校舎は僕の微細な第六感を否定するようにどつしりと静かな威厳を秘めてそこに佇んでいた。美術室の窓ガラスが夕焼けを反射して茜色に輝いている。佐伯はあそこにいるのだろうか。

僕は鞆を自転車の前かごに残したまま校舎に駆け戻った。

今から全力で自転車をこいでも母さんと話ができる時間はわずかしか残らないのにと後ろ髪を引かれる思いがしたが、どうにも先ほどの僕の心に届いた佐伯の声が胸騒ぎを起こさせてならない。

ちよつと確認するだけ。何事もなければそれですぐに引き返せば良い。

靴を脱ぎ、上履きを履く手間を惜しんで靴下のまま一気に三階に駆け上がったところで今度ははつきりと佐伯の声を耳で捉えた。やつぱり錯覚なんかじゃなかった。

「やめるよっ！離せっ！」

美術室の中で床にイーゼルや絵筆などが転がったような硬質な音が廊下に響き渡る。佐伯が誰かと揉み合っているようだった。

僕は階段の上で動けなくなった。佐伯の身に何かあったのではないかという直感に従ってここにやってきて、その感覚が正しかったのが明らかになったのに僕は立ちすくんでしまっていた。だったらいったい僕は何をしに来たのか。

怖かった。僕は薄暗い廊下で得体の知れない恐怖に身体の自由を掬めとられていた。何故だろう。何が怖いのだろう。佐伯が誰かに襲われているという事件に首を突っ込むことに面倒さを感じているのか。その誰かの暴力的行為の標的になるという危険性が心を驚愕みにするのか。それとも……。

「あたしに触るな！マツ！」

そうだ。僕は知っていた。陽平が佐伯のことを好きだということ。佐伯が飲みさしのジュースを僕にくれるときに見せた陽平の嫉妬に燃えた眼差しを。積極的に佐伯に話しかけるのだが軽くあしらわれて悔しそうに歯がみをしている彼の暗い表情を。

僕は怖かったのだ。彼を失うことを。彼の友人であるという僕の立場を失うことを。

僕なんて日陰の道端に生える名もなき雑草のようなものだ。顔が整っているわけでもなければ、足が速いわけでもない。面白いことを言ってクラスを楽しませることもできない。

そんな僕にとって陽平は光であり水でもあった。

みんなの邪魔にならないように汲々として毎日を過ごす僕は不意に訪れる彼とのたわいもない会話の間にだけはまばゆい光が全身を照らしているのを存分に味わいかつ潤いを吸収しているような気がしていた。その短い時間だけ僕は四肢を思い切り伸ばすことができる。彼から照射されるものを体中で受け止めることを許されている時間だからだ。

他のみんなにとっても大なり小なり陽平とはそういう存在なのだと思う。

僕は幸運にも彼と知り合いになれて友人と言えるぐらいに言葉を交わしている。それだけで周りから見れば少し羨ましがられているはずだ。陽平と冗談を言い合っている間に僕は周囲からの羨望の視線を疑いようもなく感じているのだから。そして僕もそういう類の眼差しを気づかない振りをしながら肌に受け止め優越に浸り快感を覚えている。僕が周囲に対して優越感を抱けるのは学校生活でその瞬間だけと言っても良い。

それなのに。

ここに一步足を踏み入れれば僕は彼の全てと正面に対峙し彼の行動を激しく指弾しなければならなくなる。僕は校内一の人気者、学校の太陽であり慈愛の雨とも言うべき彼の不倶戴天の敵となってしまう。

僕の膝は激しく震えていた。どうかすれば後ずさりしてしまいそうだ。逃げ出すことができればどれだけ楽か。しかしここで逃げれば佐伯はどうなってしまふ。こうしている今も佐伯の自由は少しずつ奪われ、そして最後には……。

「どういう意味なんだよ！」

陽平の荒い息遣いが聞こえてくる。彼の声は怒りを露わにしていた。困惑してもいるようだった。今までに彼から聞いたことのないどす黒い響きだった。

「何がよ」

二人の動きが止まったようだ。わずかな距離を保ちながら正対し睨みあっている様子が目に浮かぶ。

「光太郎なんかのどこがいいんだよ」

「どうして光太郎が出てくるのよ」

「同情なんだろ？女子とろくすっぽ喋ることもできないダサいあいつが可哀そうだと思っただんだろ。それともいつも女子に囲まれてる俺への当てつけか？」

「何言ってるの？馬鹿じゃない」

「馬鹿はお前だろ。いいから俺の言うこと聞けよ！」

直後、佐伯が発した短く甲高い悲鳴が僕の何かを引き裂いた。左の肩口から右脇腹にかけて鋭利な刃物で両断されたような感覚があつてから急に全身に力が漲った。

再び激しく動き出した美術室に僕は気がつけば足を踏み入れていた。

「やめろ、陽平！」

「光太郎、助けてっ！」

床の上に横たわり陽平に馬乗りになられて押さえつけられていた佐伯が僕に向かって手を伸ばす。

僕を振り返った陽平の顔。西日がいつの間にか没した薄闇の美術室でも彼の表情がみるみる色を失っていくのが分かる。

彼は周囲に照射すべき内面からの光を失っていた。陽平から僕は今、何も感じられなかった。何も受け取れなかった。

呆然としている陽平を振りほどき佐伯がスカートの裾が捲れ上がっているのも直さずに僕の方に駆けてくる。

彼女は僕の腕にしがみつくと陽平の視線から身を隠すように背中

に回り込んだ。僕のカッターシャツをつかむ彼女の手が震えているのが分かる。

佐伯が恐怖に戦っている。あの佐伯が僕にすがっている。僕は不意にこみ上げてきた思いの丈を目一杯吐き散らした。

「陽平。お前、何やってるんだよ。これがお前の人生にどういう意味を持つんだよ！」

床に座り込み力なく壁にもたれていた陽平が僕の言葉でどんな風に表情を動かしたかは見えなかった。

僕はまだ震えがおさまらず僕のシャツを破れてしまいそうなくらいに強く握っている佐伯の指を少しずつはがし、その肩に軽く手を置いて廊下に促した。

ドアを出るときに不意に佐伯が振り返り美術室の床に転がっている大きな紙袋をおずおずと指さした。

それは僕らと陽平の丁度間にある。捨て猫のように弱々しい目で佐伯が僕を見上げる。僕は佐伯の肩を軽く叩いてその袋を取りに陽平の前まで歩いていった。

紙袋を拾い上げても陽平はぴくりとも動かなかった。

暗くてよく見えないが鼻をすすする音が聞こえた。

外は夜の一步手前という時間帯で西の空には残照があるが灯りの少ない校内では足元さえ覚束なかった。

校舎の窓からぬつと顔を出した丸い月は若干赤みを帯びていて妙に禍々しく印象的に見える。先ほどの陽平の凶暴な行動を目の当たりにして僕の神経が過敏になっているからだろうか。

月明かりに照らされた佐伯は右の肘辺りを左手で抱えるようにしている。

「職員室、行く？」僕は目撃者として言わなくてはいけないことを口にした。「行くなら一緒に行くよ」

美術室での出来事は犯罪というカテゴリーに含まれる可能性がある。だとすれば被害者である佐伯は陽平を公に糾弾する権利があるし、青臭く言えば教師を通じて陽平の親や警察に連絡を取ることが今回の場合の社会的に正しい手続きのように思う。佐伯を病院に連れていって怪我があれば治療を受けさせてやることも必要だ。

しかし校舎の階段を降りながら僕が考えていたことはもっと別のことだった。

佐伯について美術室まで行けば良かった。

僕の頭はそれに固執していた。もしそうしていれば陽平が過ちを起こすことも佐伯が傷を負うこともなかったのに。

今さらそんなことを考えても無意味だということや、あのときの僕がついていくと言っても佐伯に即却下されただろうといことも分かっている。しかももし仮に今日はそれで事件を防ぐことができて陽平が佐伯のことを好きである以上、遅かれ早かれこういうことになったのだろう。

しかし、それでも僕は何かして今回のことをなかったことにしたかった。可能であるのなら時空の狭間に飛び込んで時間をさかのぼり事が起こる前の佐伯か陽平と出会って話をしたかった。

そして何度考えてもそれができないという現実にはぶち当たって下唇を噛みしめた。

だが、僕のわずかに残されていた冷静な思考の回路が被害者に付き添って行くべきところには行かなくてはいけないという当たり前の行動を何とか思い起こさせた。それが事件に間接的にでも関わった僕の務めだった。

俯いた佐伯の顔はよく見えなかったが立ち止まった彼女は確かに大きくゆっくりと首を横に振った。

それを確認して僕はホツと胸をなで下ろしていた。

提案しておきながら僕は職員室に行きたいわけではなかった。

いいのか、ともう一度訊ねる僕は卑怯な人間だ。全てを佐伯の判断に委ねてしまい、その意思を尊重するような顔つきで実のところは責任逃れをしている僕は偽善者だ。

どうしてだろう。この期に及んでも僕は何とか陽平の進学とこれからのサッカー人生を守れないだろうかと考えていた。

本来的には身体と心に傷を負った佐伯のことが今は一番であるべきなのに。

「肘、痛いのか？」

「平気」

空に浮かんでいる仄かに赤い血の滲んだ眼球のような満月。月を見るたびに今日のことを思い出してしまいそうで僕は佐伯の隣を地面を睨みつけながら自転車置き場に向かった。

できることならこのまま佐伯が目を閉じ、口をつぐむことで今回のことは三人だけの秘密にしておきたい。そして時間の流れに身を委ね現実だったのか夢だったのか分からない曖昧な程度になるまで今日の記憶をはるか彼方におしやってしまいたかった。

身体がふらふらするから、と自転車を押して歩きだした彼女の横を同じようにして僕も並んで歩いた。

彼女の家は歩くと二十分ほどかかるらしいが、今日は彼女を一人にするわけにはいかない。しかし、並んで歩いても沈黙だけが重苦

しく続いてしまう。腕が触れ合うほどそばにいるのに会話がないのは息が詰まった。

「佐伯は絵を描くのが本当に好きなんだな」

絵の話題なら今の佐伯でも話せるかと思った。

「好きだけど、なんで？」

佐伯の目に少し力が戻ってくる。

「絵を描くのがもつとうまくなりたくてK高目指してるんだろ？それで苦手の勉強もあんなに真剣に取り組んで、いつもすごいなと思ってるんだ」

正直な感想だった。

自分の夢のためなら嫌だと思うことでも音を上げずに黙々とこなす佐伯のひたむきな姿を目にして僕はたびたび心を揺り動かされている。この年齢で将来の夢をしつかり見据え、それに対して努力を惜しまない。そういう姿勢を目の前で見せられると僕はすごいなと感心すると同時に自分がちっぽけな存在に思えてきて情けない気持ちになってしまう。

僕は将来、何になりたいのだろう。今の時点ですっかり自分の未来像を描いていないとあっちへふらふら、こっちへふらふらと小さな帆船のように周りに吹き付ける風の影響次第で針路を見失い、振り返ればどうしてこんなところへと思うようなところに辿りついてしまうのではないだろうか。

「夢のためなら何だってできるだろ？」

中学三年生でこんなことを言う奴はなかなかいない。

そんな言葉を臆面もなく聞かされたらこっちが恥かしくなってしまう。

しかし、彼女のきりりと締まった声には冗談めかした色は微塵も浮かんではない。彼女のように夢を自分の視野の中心に据えている人には今の言葉は当たり前のものなのだろう。だが、波間に漂うちっぽけな存在の僕には会話の正面に捉えるには彼女の夢はあまりに大きく眩しくて少し話題の方向性を変えた。

「その絵のモデルっているの？」

僕が拾ってきた紙袋には佐伯が描いていた絵が入っていた。三面鏡で口紅を引く女性が描かれている。

「あたしが小さいときのお母さん。お母さんが鏡を見ながら化粧するのを見てるのが一番好きだったんだ。どんどんきれいになってくお母さんが鏡越しにあたしにっこり笑ってくれるのをいつも胸をときめかせながら待ってた」

「へえ。お母さんのこと好きなんだね」

「もちろん。私が生まれた時からずっと女手一つで私を育ててくれるんだから本当にありがたいつて思ってる」

こんなに素直に親への感謝の気持ちを言えるなんてすごいと思った。そして彼女に父親がいないことを初めて知った。

彼女の言葉の背景には、何があったの、とは簡単には訊けないような事情が垣間見えるようで僕は黙り込んだ。彼女が普段見せている相手を威圧する鉄仮面のような表情の裏側には彼女のこれまでの生い立ちも大きな要因として横たわっているのは間違いない。

うちもいろいろあるけど佐伯の家にもいろいろあったんだろうな。「あたし、もうすぐ父親ができるかもしれないんだ」佐伯の声は複雑な色を帯びているようだった。少なくとも単純に喜んでいる様子ではない。「その人、あたしの本当の父親みたいんだけど、なかなか……ね」

うまく言えないけど、と佐伯は呟いた。

いつも歯切れの良い佐伯が「なかなか」の後に続く言葉を見つけれないでいる。きっとそこに収まる言葉は一つではないのだろう。どんな国語学者だって心理学者だって十五歳の感情は簡単には表現できない。

「そっか」

簡単に「大変だね」と言ってしまうそう僕慌てて口を噤む。

僕みたいな半人前の人間が何か言葉を掛けられるような性質の問題ではないような気がしている。

佐伯も僕に何かを求めているわけではないだろう。陽平とので傷を負って脆くなった心の壁からたまたま弱音のようなものが漏れ出てしまっただけのことだ。

その人がどうして実の父親だと分かるのか。実の父親だとその人は今までどこで何をしていたのか。その人はいつから佐伯のことを実の娘だと認識していたのか。全く知らなかったのか、それとも知っていながら事実から逃げていたのか。佐伯はその人を実の父親として迎えることに抵抗がないのか。

訊ねたいことはいくつも出てくるが部外者の僕がおいそれと触れて良い問題ではない。

「この絵、結婚祝いにあげようと思って」

「きつとお母さん喜ぶね」

彼女は前を向いたまま満足そうに頷いた。

「大げさじゃなく今のあたしの家狭いから。あたしがどんな絵を描いてるかお母さんにすぐ分かっちゃう。今回はサプライズってことにしたかったから家では描けなかったんだ」

「だから美術室だったのか」

「そういうこと。でも美術室の方が集中できるってこともあるよ。うちは狭い上に騒々しいから」

何故騒々しいのだろうか。佐伯には幼い弟か妹でもいるのだろうか。

しかし、たつた今佐伯家の少し複雑な家庭環境を聞いたばかりではそれ以上のことを訊ねることも憚られた。

美術室の方が集中できるということの一面は理解できた。僕も今回佐伯と図書室で勉強してみたら自分の部屋でやるよりもはかどっている。

僕らは秋の夜道をてくてく歩いた。二人の自転車のライトが小さく道路を照らし揺れて交差する。

「光太郎もお母さんのこと好きでしょ？あたし、親を嫌いだって言う人、嫌いだからね」

彼女の眼の奥には炎が見えるようだった。母親に対する強く熱い想いが覗いている。

「好きだよ。好きなんだけど……なかなかね」

僕も「なかなか」に思いを込めた。

母さんの事故から時間が経って、家に母さんがいないことが日常になってきた。だけどそれに慣れてしまったわけじゃない。こんな状態を普通だとは思えない。思えないけど、非力な僕に母さんのためにしてあげられることは限られている。母さんが元氣を取り戻すことが僕自身のためでもあることは分かっているのに。

「あ、ごめん。あたしのせいで今日病院に行けなかったね。今からでも行つて。あたしもう大丈夫だから」

「うん。でも、今日はもういいんだ」

僕が言つと佐伯は今にも何かが零れ出しそうな哀しそうな目で僕を見た。

「面会時間終わっちゃった？それならちよつと今から病院に電話してよ。お母さんにあたしから謝らせて」

「本当にいいんだって」

僕は苦笑した。

今から病院に向かつて眠りの中にいる母さんに独り言のように話しかけることしかできない。今まで前もって知らせることなく見舞いを休んだ日はなく、母さんに心配を掛けたかもしれないが、今さらどうしようもない。やはり時間はさかのぼれない。

僕が首を横に振ると佐伯はまるで駄々っ子のように自転車を止めて立ち尽くした。

「光太郎が良くつてもあたしが良くないよ。入院してるならなおさからお母さんとの時間を大切にしてもらいたいのに。お母さん、この病院に入院してるの？」僕が口を開かずにいると彼女は携帯電話を操作し始めた。ネット検索し病院の電話番号を探そうとしているようだった。「この辺りで大きな病院つて言えば……」

僕も立ち止まって佐伯を振り返った。

僕が、母さんの見舞いに行く、と言い残して突然立ち去ったのを受けて佐伯が楽しみにしていた観覧車に乗るのをやめたことを思い起こしていた。彼女にとって母親という存在に対する思い入れは僕が想像するよりも深いようだ。彼女は今日の出来事で僕が母さんの見舞いに行けなくなってしまったことをとても重い罪悪と感じているのだろう。

だが病院に電話しても今の時間に母さんが受話器を取ることはない。

「もうこの時間には寝てるんだ」

「そうなんだ。病院って消灯時間早いって言うもんね」

佐伯は僕の腕時計を覗き見て少し皮肉っぽく軽い口調で言った。

まだ7時を過ぎたところだ。

生活リズムを大切にしないではいけない入院患者もこんな時間に寝付けるはずがない。

佐伯は僕が冗談を言っていると思っているのだろう。

でも僕が母さんのことで冗談を言うはずがない。

僕は再び足を前に出した。しぶしぶといった感じで佐伯が横に並んでくる。

「あそこがあたしんちだよ。ゆかりってお店」

佐伯の指の先に目を向けると20メートルほど行ったところに小さな間口の入り口に白い暖簾が掛かっている定食屋のような店構えがあった。店舗の壁に設置してある小型の電光掲示に「台所 ゆかり」と表示されているのが読める。

佐伯の家が騒々しいというのが何となく理解できた。お酒を出す店なら酔客が騒ぐこともあるのだろう。

「佐伯のお母さんがゆかりさん？」

「あら。良く分かったね」佐伯は完全に僕を小ばかにしている。今度は少し角度を上げて再び指をさした。「二階の角が私の部屋。上がってく？」

突然の申し出に僕は反射的に首を振った。

平然と誘ってくるのは僕をからかっているのかもしれないし、クラスメイトの女子の部屋に上がるにはそれなりに勇気がいる。

僕たちはしばらく佐伯の家を目前にして自転車のハンドルを握ったまま黙ってしまった。

ここまで来て部屋に上がらないとなるとここでサヨナラとなる。

どちらかが「じゃあ」と手を振ればそれで終わりだ。しかし、互いにそうはしないのは佐伯はまだ自宅の扉を開けるには自分の身体や心に残った先ほどの感触が生々しすぎるのかもしれないし、僕は佐伯に母さんの状態について中途半端な知識を与えたままにしておくのは落着かなかった。

ここで僕が自転車に乗って帰ってしまったら佐伯は仕事をする母親の邪魔をしないために一人寂しく自分の部屋で膝を抱えて時間を過ごすだろう。

後から歩いてきたおじさんが僕たちを追い抜いていくときにチラッとこちらを見たのが分かった。

道端で言葉を交わすことなく俯いて突っ立っている男女の中学生はどのように映っただろうか。

そのおじさんは立ち止まることなく慣れた感じで「台所　ゆかり」の暖簾をくぐっていった。

佐伯がまだ一人になりたくないのなら。

今はそのことを佐伯の口から言わせては可哀そうだという気持ち之急に萌して僕は慌てて口を開いた。

「あのさ」彼女の瞳に僕の袖をつかまえたような寂しさが浮かんでいる。「ちよつとここら辺を一周しよっか」

「いいよ」

光太郎がそうしたいのなら、という調子の返事だったが、それが虚勢でしかないのは間髪入れないタイミングだったことから分かる。今日の佐伯はやはり傷を負っている。

僕たちは再び自転車を押した。

佐伯の母親がどんな人かと「台所　ゆかり」の前を通り過ぎる時

に店内の様子を窺おうとしたが暖簾が邪魔をして木製のカウンターと幾つか並んでいる椅子しか見えなかった。

二人の自転車のライトが僕たちの気持ちを表すようにゆらりゆらりと近付いたり離れたりする。少しずつ佐伯の家は遠ざかり、それにつれて僕の心は凧いでいった。

「俺の母さんは二年前に交通事故にあつたんだ」僕は自分の記憶を整理するようにゆっくりと言葉を選んで話した。「母さんが自転車に乗っていて相手は信号無視のトラック。母さんは十五メートル以上ふっ飛ばされた。頭を強く打って丸五日間こん睡状態。六日目に医者が、このまま目を開けずに遷延性意識障害、俗に言う植物状態になる可能性が高いです、って父親と俺に告げたときに母さんは奇跡的に目を覚ましたんだ」

「よかった」

母さんが生きていることを知っているのに佐伯は僕の言葉にホツとした息をもらす。

「その後すぐにまた眠っちゃったけど、母さんは死んでいないってことが実感できてすごく嬉しかった。次の日、また同じ時間に母さんは目を覚まして、その時は一時間ぐらい起きていられた。その次の日は起きていられる時間が十分ぐらい延びた。その次の日も十分ぐらい延びた。そうやって毎日徐々に起きていられる時間は長くなつていったんだ」

僕の話を聞く佐伯の顔に、もう安心だね、という言葉が浮かんでいる。そうやって少しずつ健康を取り戻して事故の前と同じ状態に戻っていったんだね、と。

だったら今日まで入院しているはずじゃないじゃないか。

「だけど、二時間起きていられるようになってからは時間が延びてないんだ」

佐伯は僕の言ったことが理解できていないようだった。

「どういうこと？」

「母さんはこの二年間毎日決まって午後四時半頃に目を覚まし、大

体二時間ぐらい経つと眠ってしまふ。それ以外の時間に起きることはないんだ」

「そんなことつて……」

「あるんだ。何が原因か分からない。いろんな医者に診てもらったけど誰も答えられないんだ」

翌日、僕が登校すると佐伯はすでに自分の席に座っていた。いつもどおり頼杖を突いて群を嫌う狼のように誰とも言葉を交わすことなく、ただ気だるそうな視線を窓の外に向けていた。

そうだろうな、と僕は思った。

佐伯なら、努めてなのか自然になのかは分からないがこれまでの日常を今日も続けるだろう。ただ、制服の袖から右肘を覆う包帯が少し見えているのが明らかにいつもと違うことだった。

大丈夫か、と声を掛けたいと思ったが、佐伯の教室での他を寄せ付けない雰囲気は侵しがたく他のクラスメイトが近くにいては昨日のことを話しづらくもあつてやめておいた。

あとは……。

佐伯の出方は予想できていたのだが、陽平が僕や佐伯にどういう態度を示すのか僕には見当がつかなかった。

平身低頭で詫びを入れるのだろうか。まるで待ち合わせに遅れたときのように軽い調子で謝るのだろうか。それとも僕たちのことを無視して絶縁状態に陥るのだろうか。

そのとき僕はどういう行動に出るべきなのか。

僕は頭の奥に重く締め付けるような圧迫感を覚えていた。

僕は完全に寝不足だった。どうするどうする、と自問自答して結論が出ないまま今朝を迎え落ち着かない気持ちのまま教室で陽平を待ち続けたが、彼はいつまで経っても姿を見せない。今日から中間テストだというのに。

「誰か、松本君から何か聞いてない？」

朝のホームルームで坂本先生が誰とはなく問いかけるが僕は前の席の生徒の背中辺りをぼんやり眺めながら黙ってやり過ごした。

昨日のことが欠席の原因であることは疑いないところだが、だからと言って僕に何が言えるだろう。

後ろにいる佐伯はどうするだろうかと思ったが、彼女もその場では一言も発することはなかった。きつと先ほどと変わらない姿勢で視線を外へ向けたままだろう。

「まあ、季節の変わり目だから体調崩したのかもね。みんなも気を付けるのよ。受験生は健康第一なんだから」

そう言う先生は元氣そうに見えた。張りがあるのは声だけではなく。化粧を変えたのだろうか。どこがどうとは言えないが顔全体に華やいだ感じが見られるような気がする。

ここのところトレードマークのカーディガンも羽織っていない。

そのことに気づいたとき車中の父と坂本先生の情景が僕の目に浮かんできた。どことなく生き生きとして見える彼女の様子が父が影響しているかもしれないと考えて僕はその思考を追い払うように首を横に振った。

結局その日、陽平は姿を見せることはなかった。

すでにスポーツ推薦での進学が決まっている彼にとって学業面の成績など今さらどうでも良いのかもしれない。だとすれば明日のテストもおそらく彼は教室には姿を見せないだろう。

放課後、僕は何をするということもなく教室に残って窓から外を眺めていた。

この学校ではテスト期間中は部活は行われない。当然、グラウンドは荒涼たる砂漠のように誰の姿もなく時折強い風が吹き抜けるだけだ。

陽平も佐伯と同じぐらいに熱く自分の夢を追っていると僕は思っている。だからテストはさぼってもサッカーの練習に姿を見せるかもしれないと思ったのだが、いつまで経ってものっぺりとした砂漠の景色は時間が止まっているような錯覚に陥るほど変化はなかった。図書室に向かうと佐伯が教科書を開いて黙々とノートに書き込みを加えていた。陽平に怖い思いをさせられても、そしてその陽平が無断で学校を休んでも彼女の夢へ向かって取り組む形に変化はない。僕は彼女の邪魔をしないように静かにその斜め向かいに腰を下ろ

し自分の勉強を始めた。

佐伯の精神力には脱帽だった。

全くいつもと変わらず勉強に取り組んでいるように見える。時折、分からないところの解説を求めたり解き方の確認をしてきたりするが、余計なことは一切喋らずすぐに自分だけの世界に戻っていく。目を見開いてノートにシャーペンを走らせる彼女のその姿勢からは夢の実現に向けての気迫がにじみ出ているようだった。

僕はどうにも集中を欠いてしまっていた。

佐伯の集中力に触発されて自分もやらなくてはいけないと思いはするのだが昨日の美術室でのことを思い出したり、陽平が今何をしているかを考えたりということを繰り返してしまう。

問題を解く気になれず、ノートを読み返しても頭に入ってこず、ただぼんやりと教科書を眺めているうちに時間だけが過ぎていつてしまっていた。

「そろそろ上がるつか」

佐伯は四時十五分きっかりに机の上を整理しだした。

僕はちつともはかどらなかつた勉強を切り上げ図書室を出た。

自転車置き場で、じゃあ、と言って別れたが、僕は自分の自転車を押して自転車置き場を出たところで佐伯を振り返った。

佐伯も自転車に乗らずに少し険しい顔でこちらを見ていた。

「昨日はありがとう。……それだけ。お母さんによろしく。じゃね」
それだけ言つて佐伯は僕に背中を見せた。僕は追いかけるように気になっていたことを佐伯に投げかけた。

「腕、大丈夫？」

「大丈夫」

佐伯はちらりとこちらを振り返ると寂しそうでもあり苦しそうでもある頬笑みだけ残してサッと自転車を漕いで行ってしまった。

僕は取り残されたようなひんやりと肌寒い心に活を入れ、病院に向かつて自転車を漕いだ。

昨日来れなかつたことについて母さんに何と言おうか考えながら

病室に着くと、そこには白衣の人間が二人いた。

一人は極端に言葉数の少ない母さんの現在の担当医師だったが、もう一人の計器を操作している男性を僕はこれまで一度も見たことがなかった。

二日ぶりに会う母さんはまだ眠っていた。

目を閉じている母さんの頭には何やら見慣れないコード類が何本も伸びていて医師が触っている計器に繋がっていた。

お世辞にも広いとは言えない部屋が今日はさらに狭く感じる。ベッドの大きさは変わっていないが、母さんの寝姿もどこか窮屈そうに見えた。

「こんにちは。光太郎君ですね」

初めて見る医師は「柳田です」と機械から手を放し人の好さそうな柔和な表情で僕に挨拶をしてきた。

顔のつくりだけでなく色白でややぼつちやりとした体形から何となく親しみやすい雰囲気が出されている。年齢は父や母さんと同じぐらいだろうか。童顔だから実際はもっと老けているのかもしれない。

「また実験ですか」

僕はあなたのその外見にはだまされませんよ、という気持ちで心の中で身構えた。

母さんは事故以来何度となく検査を受けてきた。

はじめのうちは通常の生活を取り戻すために必要な治療の一環だとありがたく思い、かつ期待を込めて母さんが様々な医療機器に繋がれるのを見守っていた。しかし、医師が代わる代わるやってきては検査やらテストやらを幾度となく繰り返しても母さんの状態は一向に好転しなかった。

事故の時に強く頭を打っておられ、その影響が現在の状況を引き起こしているのは間違いありませんが、脳のどの部分に起因しているのかわかなか判明しないのです。

彼らがロボットのように表情なく言い訳めいた説明を繰り返すの

を聞かされては失望をさらなる失望で塗り込める作業は次第にやり場のない苛立ちを伴うようになってくる。

最近ではその一本調子の決り文句ですら口にしない医師もいて、検査データをこちらに開示してくれるわけでもない（見せてもらったところで理解できないのだろが）。そうなると母さんがほぼ決まった時間に目覚め、二時間弱の経過で意識を失うように眠りに落ちるという極めて珍しい症例であることを受けて、この人たちは治療のためと言うよりは興味本位で母さんをモルモットのように扱っているのではないかという疑念すら湧いてくる。

「いいえ」柳田は諭すような口調で僕に語りかけた。「これは治療の一環です。ご期待に添えない状態が続いていて心苦しいですが、私たちも母さんに一日でも早く回復していただけるようにと努力しているのです」

正面切ってそう言われると返す言葉がない。

僕自身には何の力もなく、彼らに見放されたらどうしようもないという厳然たる事実が僕の心に生えた抵抗の牙をするりと抜いていく。

僕と医師の間に横たわる母さんが花卉が開くように少しずつゆっくりと目を開ける。

「ご気分はいかがですか？」

母さんは柳田にこたえる前に僕の存在を確認して一つ頷いて見せてから「変わらないです」と呟いた。

「そうですか」

柳田は満足そうに目を細めると素早く母さんの頭からコードを取り外し、母さんと僕に軽く頭を下げてもう一人の医師と部屋を出ていった。

「また検査？」

「そう。良く分からないけど」

母さんが僕以上にうんざりそうなのを見て、しまった、と唇の内側を噛む。

「でも、原因を調べないことには治るものも治らないよ。検査で痛いとか息苦しいとかない？」

「それはないけど」

「じゃあ、どんどん調べてもらって早く良くなる。数打ちや当たるよ。さっきのお医者さんも頑張るって言ってたし」

「そうね。あの新しい先生は今までの中で一番感じの良い人だったわ。しかも人懐っこい顔してるけど、ああ見えてその道の権威なんだって。あのいつも黙りこくってる担当の先生が血走った眼で自分から話しかけてるぐらいだったから相当すごい人なんじゃないかな」

「権威って呼ばれるような人に診てもらえるなんて、母さんも大したもんだね」

「そうよ。こう見えてもただ寝てるだけじゃないのよ」

母さんが胸を張る姿に僕は噴き出すように笑って見せた。

しかし、母さんは強がっているだけなのだということは僕には分かる。そして僕の笑顔も作りものだということを母さんだって見破っているだろう。僕と母さんは病室という舞台上で哀しい芝居を演じているのだ。

道の権威をもつてしても駄目だったら。

この二年間期待を裏切られ続けてきている以上、それを考えないようにすることはもう僕には難しくなってきた。僕にできないのなら本人はなおさらだ。それを腹の底に互いに隠して僕と母さんは表面を取り繕っている。

そしてこの半年で母さんが起きていられる時間は少しずつ短くなってきたというのを僕は誰にも話せずにいる。

次の日も陽平は学校を休んだ。

推薦での進学が決まっっている陽平にとって中間テストの一日目を休んでしまった今となつては残りのテストを受ける気にならないのは誰が想像しても分かるというものだ。

そして明日は土曜日なので、陽平がクラスに姿を見せるのは早くても月曜日の朝となる。

それが予想できていたので昨日はゆつくりと眠ることができた。睡眠不足が解消されると何となく心にゆとりができたようだった。ぐちゃぐちゃしていた頭の中もすっきりして昨日よりは落ち着いて物事を考えることができるようになった。

だからと言って自分が今後佐伯や陽平にどう接していけば良いか判断はつかないままだったが。

坂本先生も今朝のホームルームでは陽平がいないことだけ確認して何も言わなかった。

もし陽平から何らかの連絡が来ているなら、陽平がいないことを確認する必要はないし、心配している生徒もいるだろうからと陽平が休んでいる理由を説明しただろう。触れないということはやはり学校にも陽平から連絡は来ていないということか。

そもそもあんなことにならなくても陽平はテストを休むつもりだったのかもしれない。出席する気がないからこそ前日に告白したと考えることもできる。いくら陽平でも振られる可能性も少しは考慮に入れていたはずだ。

気になるのは陽平は佐伯に断られたときにはあんな風に力ずくの行動に出ようと前もって計画していたのかということだった。それとも実際にあの場面に至って佐伯への気持ちを抑えきれず頭に血が上って暴走してしまったのか。もし前者だとすれば陽平の罪はさらに重くなる。佐伯も完全に陽平を危害を加えてきた犯罪者として

見るように思う。犯罪者をすぐ許すなんてできることではない。

放課後、僕は無言で教室を出ていく佐伯の背中を見送った。

今日も彼女は図書室で勉強するだろう。僕も彼女を追っていつもどおり図書室に行くつもりではある。

しかし、僕は教室の窓のそばから離れられないでいた。

席を立ち窓枠に肘を置いて頬杖をつきながらぼんやりとグラウンドを見下ろす。

サッカーを取ったら何も残らないような生活を送っていた陽平にとってボールを蹴らない日が続くなんて耐えられないのではないか。学校に来なくてもボールを蹴ることはできるし、彼が現れたところで僕は何をしたいのか自分でも良く理解できていない。だけどグラウンドが見える窓のそばから離れるのはどうしても後ろ髪をひかれるような思いがするのだった。

外は朝から雲が低く立ち込めている。湿り気と埃のにおいがする風がカーテンを静かに揺らす。こんな空模様では陽平はなおさら外に出る気がしないかもしれない。

「仁科君。何か知ってたら教えて」

振り返ると思い詰めた表情の沙織が立っていて、僕は心の中で悲鳴に近いような声を出していた。

今の僕にとって沙織は最も顔を合わせたくない人物だった。僕は背中が窓枠につくまで後ずさりをして彼女とできるだけ距離を取ろうとした。

沙織は真剣な面持ちで僕の顔をまじまじと見つめてくる。

「何かって？」

僕はとりあえずとぼけてみせる。しかし、後ろめたさが顔色に出ている自信はない。

僕の手応えのない態度に彼女は少し苛立ちを覚えたようだった。

「もちろん」と大きな声を出した彼女は周囲に目をやりながら声をひそめた。

「陽平君のことよ」

「風邪でもひいたんじゃないの」

「そうかなあ。一昨日は元気そうだったよ」

「テストなんか受ける必要がないから家で惰眠を貪ってるのか」

それはないわ、と彼女は言下に否定する。

「陽平君はサッカー馬鹿なんだから、毎日グラウンドでボールを蹴らないと足がうずいちゃうの。だからテストは受けなくてもサッカーのために学校には来るはずなのよ」

沙織は一学期の期末テストのときのことをすっかり覚えていた。放課後に陽平は誰もいないグラウンドで一人でシュート練習をしていたらしい。

「いくらサッカーにのめり込んでても、たまにはボールを見たくないときもあるんじゃないかな。二学期が始まってすぐに陽平と栗山さんって何人が集まってカラオケ行ったことあるでしょ。あのときあいつ、たまには息抜きも必要だからって言ってたよ」

「あれは私が無理やり誘ったのよ。前からお願いし続けてたから仕方なく来てくれたの。でも1時間だけ歌ったら、ボール蹴らないと足がうずくから、って学校に戻っちゃったのよ」沙織は探偵が考え事をするように僕の顔を右へ左へ歩を進めながら人差し指を唇にあてた。「その陽平君が昨日は学校に来なかった。そして今日も来ていない」

「学校じゃなくてどこかの公園でボール蹴ってるのかも」

僕は苦し紛れの推測を口にしたが、沙織はそれを聞こえていないかのようにあつさり無視して窓に近寄った。窓枠に手を掛け外に身を乗り出し吹き抜ける風を頬で弾きかえした。

「陽平くん。どこ行っただい？何してるー？」

沙織は口に手を添え誰もいないグラウンドに向かって大きな声を張り上げた。その声は厚く広がる雲に吸い込まれるようにすぐに掻き消えてしまう。

不意にこちらを向いた沙織の顔は眉間のあたりに少し憂いを示していた。

「雨」言われて僕は空を見上げた。目を凝らすと確かに蜘蛛の糸のように細い軌跡が何本も見える。「私、行ってくる」

彼女は拳を握り締めて僕に宣言した。

「どこへ？」

「陽平君の家よ」沙織は目を爛々と輝かせている。「きっとこれはチャンスなんだわ。何があったかは分からないけどきつと何らかの事情で陽平君はボールを蹴ることさえ億劫なぐらいに打ちひしがれたのよ。心に傷を負った彼は自分の部屋に閉じこもってる。そこへ私が現れて彼のハートを全力で癒してあげるの。それで陽平君は私を愛しく思ってくれるようになる。俺にはお前が必要だ、なんて」沙織はどこを見ているのだろう。視線が宙を彷徨う。「今日という日に私は佐伯さんを逆転できるかもしれないわ」

沙織のたくましさに僕はただただ感心するばかりだった。彼女の力強い前向きな言葉に何故か僕の心が救われたような気がしていた。「じゃね」

沙織は軽く手を上げて小走りで僕の前から去って行く。

しかし、僕はその沙織を慌てて呼び止めた。

僕が見下ろす先のグラウンドに陽平がいた。

降り出した雨の中でボールをリフティングし始める。足の甲、太もも、額、肩、胸。ボールは意思を持っていくかのように陽平の身体にまとわりついている。

沙織は再び窓から身を乗り出した。そして陽平の姿を確認すると、「仁科君ありがと」と言い残し窓枠を押して反動をつけ、つむじ風を巻き起こすような勢いで教室を出ていった。

彼女のスカートの裾が大きく揺れて白い太もが見え隠れした残像が僕の目にくっきり焼きついて僕は暫く動けなかった。

何とか振り返ると陽平はボールを地面に落とすことなくリフティングを続けている。

すぐにグラウンドに沙織が駆けだしてきて陽平に近づいていく。そばまできて肩で息をしながら何やら話しかけているようだが、陽

平は沙織よりもボールとの会話を優先させている。

僕はその様子が面白くて一人で笑い、そして静かに窓から離れた。陽平と沙織はやはりお似合いだった。他人が見て楽しくなるようなカップルなどそうはいない。

図書室にはやはりバリバリと勉強に打ち込む佐伯の姿があった。

僕が向かい側に腰を下ろしても彼女は何も話しかけてこず、数学の問題集を次々とこなしていた。その様子に僕もみぞおちの下あたりに力をこめてやる気を漲らせシャーペンを握った。

佐伯に負けてはいられない。僕は英文法の問題集に取り組んだ。苦手な英語を何とかしないといけない。佐伯に追い抜かれないように。父に二度と「教えてやろうか」などと言わせないように。

どれぐらい時間が経っただろうか。ふと顔を起こすと佐伯が手を休めてこちらを見ていた。

「どした？」

「ちよつと訊いていい？ 解き方が分かんない」

僕が頷くと、佐伯は手を伸ばして僕に数学の問題集を見せた。シャーペンの先で三角錐が描かれている図形の問題を示す。定理や相似を使って解く少しテクニクの必要なものだ。

「これはさ、この三角形とこっちの三角形を見るとこの角度が共通してるし、辺の比を見ると同じだから……」

「え？ どの三角形のこと？」

「この三角形と、この三角形」

二つの三角形を図上で示すのだがなかなか佐伯に伝わらない。「だから、どれと、どれよ」と少し苛立ったような声で訊いてくる。しかし、僕としては三角形をシャーペンの先で囲んで見せるぐらいしか方法がない。

「こっちから見ると意味分かんない」

そう言って佐伯は僕の隣の椅子に移動してきて僕の肩に顔を寄せ「どれと、どれ？」と訊いてきた。

ふわっと佐伯の髪のおいが僕の鼻をくすぐった。甘い香りだっ

た。何だろう。柑橘系のようだけど酸っぱそうではない。佐伯のにおいは甘いにおい。どうして今まで気付かなかったのだろう。佐伯がこんなにおいにおいをさせていることに。

もって感じていたい。だけど、どこか後ろめたい。

「どした？」

「あ、いや、何でもない」

僕は慌てて机の上に意識を戻した。設問の図から二つの三角形を余白に書き写してそれぞれの角の大きさが同じであり、辺の比が同じになることを根気よく説明した。

漸く、ふんふんと頷き得心顔になった佐伯の向こうに僕らと同じクラスの女子生徒が見えた。

僕と目が合うと慌てて顔を背け図書室から出ていく。

僕はその後ろ姿に妙にいたたまれなくなる。何だろう。この落ち着かない気分。

不意に僕の心に一つの疑問が芽生えた。

僕らの姿は第三者にはどのように見えているのだろうか。

「佐伯」

「何？」

「図書室で勉強するのやめようか」

佐伯は動かしていたシャーペンを止め問題集に落としていた目を僕の顔へ向けた。

「どして？」

「そりゃ、だつて……」言いかけて、佐伯には失笑されるのが落ちだと思つたが、やっぱり一度言い出したら止められなかった。「周りの目があるから」

きっと僕や佐伯が知らないところで僕たちは噂の二人になっていたのではないか。

勉強はできるがパツとしない日陰の男子と、何を考えているか分からず近寄りがたい訳ありそんな女子転校生。放課後に毎日向かい合つて勉強するなんて怪しいよね、みたいなことで。

知らず知らず好奇の目にさらされていた二人。

そして陽平もその噂を耳にして、実際自分の目で確認したかもしれない。

彼の目には仲良く勉強する僕たちがまるで恋人同士のように見えたのだろ。そして僕たちは無意識だが彼の神経を逆なでるように秘密めかしてクラスの中では沈黙を守りつつ放課後には手を取り合うようにして向かい合っていた。

陽平の愚行を招いた一因は僕たちの行動にあるのではないか。少なくとも陽平は佐伯に対する想いを僕に打ち明けていた。陽平にしてみれば僕の行動は裏切りに見えたのかもしれない。

「周りの目？」

案の定、佐伯は僕が何を言っているのか分からない様子で至近距離で僕を見上げる。

そんな鈍感な佐伯に僕は珍しく苛立った。

「あらぬ誤解を招きかねないから」

そう口にするのが何故かつらかった。僕は今、佐伯と距離を取ろうとしている。恋人と誤解されない距離を。

それは誰のためなのか。いったい何のためなのか。

分からないけれど、僕は佐伯を遠ざけたいとけないと感じていた。図書室で一緒に勉強する前の僕たちの遠さぐらいにまで。

それが正しいことのように思えた。それが男子と女子の保つべき間隔であり感覚であるように感じた。そしてそれは数日前までは何でもない遠さだったのに、今となってはどこか身を剥がれるような痛みを伴っていた。

佐伯は僕の言いたいことに思い至ったようで、途端に眉間を曇らせた。

「あらぬ誤解って何だよ」

身体を起こして暗い視線を投げってくる佐伯に僕は思わず怯んで窓の方へ顔を向けた。

薄暮時の校庭にしとしと雨が降り続いている。窓についた水滴

で向こう側が見えにくくなっていることが僕を少しほつとさせる。僕は佐伯を正面に見た。ちょっと前までは絶対にできなかったことだ。それが今はできている。

僕らは近づいてしまったんだ。

僕にとつてこんな距離感に存在する女子は他にはいない。僕にとつて佐伯は他の女子とは違う存在になっている。特別な女子になっている。

「陽平のことどうするつもり？」

心の中の何かをものすごく振り絞って僕は佐伯に問いかけた。

これをはつきりさせないと陽平はもちろん、僕もいつまで経つても細いロープの上を歩かされているような気持ちでいることになる。「どうもしないよ」

佐伯は放り投げるように慥然と答えた。

「じゃあ、今までどおり変わらずってこと？」

返事はなかった。目を伏せたのは佐伯の方だった。暫く待つても佐伯の口からは何も聞こえてこなかった。

何も答えたくない、ということではない。一旦口を開きかけてはすぐ閉じてしまう。何かを言いたいのだが、どう表現したら良いのか言葉を探しているような様子だった。

「分かんない。マツのこと見たら悔しくて泣けてくるかもしれないし、意外に平然と喋れるかもしれないし……」

今度は僕が何も言えなくなってしまった。

やはりまだ訊いてはいけないことだったようだ。普段の様子から既に佐伯は陽平にされたことを過去のことと整理しているように見えていたが、そんなことはなかった。彼女が負った傷はまだかさぶたにもなっていないのかもしれない。

「ごめん。酷なこと訊いちゃって」

佐伯は、そんなことないけど、とつぶやいた。

「だけど、元には戻れないよ。結果だけを見れば私が床で肘を打って打撲したただけだけど、マツがあたしにしようとしたことは不注意

とか魔が差したとかで済むような話じゃない」

それはそうだ。僕は佐伯に伝わるようにはつきりと頷いた。したいと思っではいるが実際にはしていないことと、現実にしてしまったこととは決定的に違う。時計は元には戻せない。陽平は越えてはいけな一線を越えて彼女の自由を力づくで奪おうとした。許されることではない。ないけれど……。

「さっき陽平がグラウンドに来てたんだ」

「……だから何？」

陽平の名前を聞きたくないような不機嫌そうな声だ。

「あいつのこと許してやってくれないかな。あいつも大きな夢を持つてるんだ」

僕はちっばけな人間だが、陽平は違う。彼はサッカー選手になることを心に誓ってこれまで人知れず血の滲むような練習を積み重ねてきた。その夢の成就への姿勢はこれからも変わらないだろう。その本気度は佐伯の絵に対する想いに勝るとも劣らない。僕はそんな彼を尊敬し今も応援している。夢への姿勢に陽平と同じ熱さを持っている佐伯なら僕以上に陽平と共感できるのではないか。

「どうして光太郎はそうなの？」

「何が？」

「だから、どうして光太郎はあんな奴のこと助けようとするの？」
佐伯の口調が珍しく熱を帯びている。僕に何かを強く訴えようとしている。「あんなこと言われて平気なの？光太郎こそこれからマツと今まで通り変わらずやっていけるの？」

良く見ると佐伯は頬や首筋をうつすら朱に染めているようだ。ひょっとして彼女は僕のために怒ってくれているのだろうか。

僕は陽平に何を言われたのだろう。

陽平が佐伯に抱きついて押し倒そうとしていた場面。

それに遭遇した僕はパニックに陥っていたのか陽平が口走ったことをあまり覚えていない。確か、陽平は僕と佐伯が付き合っていると勘違いしていて、あんなダサい奴のどこがいいんだ、みたいなこ

とを言っていた気がするが。

「陽平が言ったことって別に間違ってるから」

「事実かどうかは問題じゃない」佐伯は吐き捨てるように言った。

「聞いた相手が不必要に傷つくかどうか。それが大事なんだよ」

相手の気持ちを慮るべきだという佐伯の言葉は僕の心にすんなり入ってきた。間違っていないとも言っべきじゃないことがある。僕は佐伯の優しさに触れて佐伯に自分の心がどうしようもなく吸い寄せられるような感覚に陥った。

しかし、それでも僕は陽平のことを守りたかった。

「あ のとき、陽平は僕がいることに気付いてなかったから。だから、僕に対して言っ たつもりじゃないよ」

僕がそう言う と佐伯はさらに厳しく僕を見つめてきた。その激しさは睨みつけるとい う表現でも生ぬるい。その眼は僕の態度に物足りなさを感じ業を煮やして赤く燃えているようだった。

至近距離の佐伯の射るような視線は銃口を銜えさせられたような確固たる恐怖で僕の心を怯ませる。しかしそうであつても僕には陽平に対して弁護したい気持ちはあるが、怒りがこみ上げてくることはなかった。

佐伯は僕の表情に彼女が期待する色が浮かんでこないのに呆れたのか嫌気がさしたのか不意に目を落とすと立ち上がつて元いた自分の席に戻つていった。机の上に広げていたものを鞆に仕舞う。

時計を見るともう帰らなくては いけない時刻だった。しかし、僕は動けなかった。佐伯の作業を黙つて見つめていた。

彼女は怒っているのだろうか。僕の態度が煮え切らないと憤っているだろうか。

「やめないから」

佐伯は鞆を肩にかけると一つ僕に宣言した。

「え？」

「ここで勉強するの、やめな いって言つたの。あたし、他人の目なんか全然気にならない。それとも……あたしの家でする？」

「それは……」

僕が口ごもると佐伯は意外にも子猫のような無邪気な笑顔を残して図書室のドアに向かった。

その柔らかい表情に僕は魔法を解かれたように身体が動きを取り戻して鞆に問題集を放り込んで佐伯の後を追いかけた。僕なんかじやとても敵わないと諸手を挙げる気分だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0326z/>

ジョーンブリヤン

2011年12月17日12時57分発行